はじめに… 1 | 「新世紀エヴァンゲリオン」はどういう話なのか… 2 | 90年代の神秘主義を背景として… 3 | もともとの福音書をどう「書き換える」ものか… 3 | エヴァは「話」ではない… 4 | 碇シンジは何をやっているか：感情だけのバケモノ… 5 | 碇シンジは何をやっているか２：プラストレーション… 6 | 「話」ではありえないことの端的な証拠… 6 | パトスの果てに「無上の射精」を願望する… 8 | 補足、深層心理学方面との乖離について… 9 | 無上の射精 ① ／蓄積されたパトス… 10 | 無上の射精 ② ／最低の男性であるべき… 10 | 無上の射精 ③ ／天国… 11 | 「エヴァ」というフィクションは存在していない… 12 | 閑話… 12

今さら新世紀エヴァンゲリオン劇場版をぜんぶ観て、それを考察しないという正しいことの解説および二十五年間のミッシングリンクの発見

「ＡＴフィールド」の陳腐性… 14 | 年代別ＡＴフィールドと、「パトス」という不意の展開… 17 | 創作、いかなる動機で「エヴァ」は作られうるか… 17 | 「話ではない」のはエヴァだけではない… 20 | パトス洗礼… 22 | パトスはロゴスを解体する… 23 | パトスを「話」だと思うようになる… 24 | 旧来のパトスには揶揄があった… 25 | ウソの区別がつかなくなった人びと… 26 | ロゴスの徒たるあなたはまったく別に存在する… 30 | 神話の主はあなたであれ… 32

31st Jan, 2022

九折空也

Quali Love Entertainment

1．はじめに

わたしはアニメ映画「新世紀エヴァンゲリオン」のファンではない。

何のファンかというと、どちらかといえば「もともと」のエヴァンゲリオンのファンだ。

「もともと」のエヴァンゲリオンといえばつまり新約聖書の「福音書」だ。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネだ。

辞書で調べればわかるとおり、エヴァンゲリオンとは福音書のことであってアニメ映画のことではない。

そしてここで取り扱って話すのは、わたしがファンではないほう、アニメ映画として知られている「エヴァ」のほうだ。

わたしは今さらになってその「エヴァ」を観た。劇場版をひととおり観て、テレビシリーズのそれは観ていない（さすがにそこまで観ている時間が個人的にない）。

「劇場版」をひととおり並べると次のとおりになる。

①略(1997)
②略(1997)
③新世紀エヴァンゲリオン劇場版 DEATH (TRUE)2 / Air / まごころを、君に(1998)
④エヴァンゲリヲン新劇場版：序(2007)
⑤エヴァンゲリヲン新劇場版：破(2009)
⑥エヴァンゲリヲン新劇場版：Q(2012)
⑦シン・エヴァンゲリオン劇場版(2021)

なぜ①②を略したかというと、その①②を修正してひとつにまとめたものが③だからだ。

番号④以降は「新」劇場版とついており、区分けのために①②③のほうをファンたちは「旧劇」と呼ぶのが習わしのようだ。

わたしは④⑤⑥⑦の順で観て、その後引き返して③を観た。

その上で、わたしはこの「エヴァ」に視認したものについて報告しようとしている。

もちろんわたしが話すからには、その内容は、「エヴァ」の熱烈なファンたちに向けては、まったく同士ならざる否定的なものになる。

それでもわたしは勝手に、わたしの話すことをどこか保険として聞いておいてもらいたいという気がしている。改めて、わたしはこの作品のファンではないので、ということを念押ししておきたい。

野球ファンでない者が野球観戦について日記を書いてもろくな態度のものにならないであろうことのように、これから示すわたしの態度も冷淡なものだ。

だが必要があって話す。

ファンに読んでもらいたいと共に、それ以上に、まったく「エヴァ」のファンでない人および、観たこともない人に読んでほしい。

なぜわたし自身ファンでもない対象についてわざわざ書き話そうとするかというと、この「エヴァ」という有名なシリーズは、まるでこの二十五年間、わたしの生きた時代の裏側で起こっていたことそのもののようで、わたしにとってはめざましい発見のあるものだったからだ。

もちろんどちらが真に表で、どちらが裏だなどと言い張るつもりはない。向こうから見ればわたしが裏で、わたしから見れば向こうが裏だ。

1997 年当時、わたしは大学生だった。その当時、記憶に新しかったのは阪神淡路大震災であり、わたしは高校生のときその震災のボランティアで一か月被災の街に住み込み、そのことを経て、縁あってか何なのか、その後神戸の大学に入ることになった。

ほとんど、わたしが生きる「話」の端緒が始まったようなころだ。

わたしがそうしてわたしの「話」を生き始めるころ、裏側で、わたしのそれとはまったく異なるものが始まり、続いていった。

そのことをわたしは二十五年後のいまになって振り返り、新しく知ったという具合だ。

わたしは現代において、あまりにも多くのものに「？？？」と首をかしげている。

この「？？？」という、わたしにとってあまりに理解不能のものが蔓延する、どころかそれらが「主流」となって席巻する中、わたしは二十五年越しのミッシングリンクを引き当てたような気分なのだ。

今から二十五年前、社会現象じみて広がった――らしい――この「エヴァ」があったということを、わたしはわたしの中の時系列に当てはめなおす。

すると、現在あるわたしの「？？？」はあまりに多くが氷解する。

この「エヴァ」ないしはそれの類似の事象が、後継を得て繁茂してゆき、その咲き誇った現代のものに向けて、わたしは「？？？」となっていたのだ。

もし、十年前から現代の 2022 年にワープしてきた人がいて、窓から外を眺めたとしたら、

「なぜ全員がマスクをしているのだろう？」

と首をかしげただろう。

何が流行したのかを知らないし、その後の変異株も知らないのだから。

そういう具合で、わたしは現代のいろんなものに「？？？」と首をかしげていたのだ。

何が流行したのかを知らなくて、その後の変異株も知らなかったから。

わたしはこれから「エヴァ」の話を少しするし、それを土台に、本来わたしがするべき話をここにする。もちろんいわゆる

「ネタバレ」を含むが、そのことはこの際もう関係ないとわたしからは申し上げたい。

２．「新世紀エヴァンゲリオン」はどういう話なのか

「新世紀エヴァンゲリオン」は、どういう話でもない。

まったく意外なことだと思われるが、この作品は――あえて作品と呼ぶとして――「話」ではないのだ。

「新世紀エヴァンゲリオン」という "話" は存在していない。

このことさえ伝えればわたしの話すところの半分は満了する。

「エヴァ」というと、「使徒」が急襲してきて、それをエヴァが撃退するというふうに知られているが、使徒という話はないし、それが襲来するという話もないのだ。

汎用人型決戦兵器・人造人間エヴァンゲリオンという話も存在していない。

人類補完計画という話も存在していないし、〇th インパクトという話も存在していない。

ゼーレなんて話もないし、ネルフなんて話もないし、ヴィレなんて話もない。

「エヴァ」に関わって、いろんな人がいろんな「考察」をしているらしいことは、ファンでなくても聞き及んでいる。

が、どのように考察しても無駄だ。

どのような話なのかを考察するのだが、これはどのようなという以前にそもそも「話」ではない。

カレンダーはどんな話か。電動マッサージ機はどんな話か。地図はどんな話か。スリッパはどんな話か。

それは「話ではない」と言うしかないだろう。

それをどんな話かと考察しても無駄だ。

綾波という話もないし、アスカという話もないし、ミサトさんという話もないし、シンジ君という話もない。ゲンドウという話も、ユイという話もない。

じゃあ何があるのかというと、フレーバーがあるのだ。

ゼーレというと、その語感から「ゼーレ」というフレーバーがある。

リリスというと、「リリス」というフレーバーがある。

パターン青というと、「パターン青」というフレーバーがある。

ＡＴフィールドというと、「ＡＴフィールド」というフレーバーがある。

ＡＴフィールドなんて「話」はない。

新世紀エヴァンゲリオンというアニメは、純粋に「絵が動いている」だけだ。

そこにさまざまな単語が語感と共にフレーバーとして添えられている。

これはある意味、作劇として斬新な、あるいは斬新という次元を超える何かだと言える。

そのことは肯定的に見れば絶賛しうるだろうし、否定的に見れば絶望的に否定できるだろう。

われわれは映画というと、大前提、何かの「話」だと思っているのだ。それは映画を作る側と観る側とのあいだで無言裡に醸成されてきた一種の約束だと言える。

映画が上映されると聞いて、その壇上でずーっと電動ノコギリが回っていたという話は古今に聞かない。

「エヴァ」には、大量の、これでもかという「フレーバー」だけがほどこされていて、それと共に、こちらも大量に、「絵が動いている」だけだ。

ただ当然ながら、その「絵が動いている」というものそれじたいは品質が高く、そのことは相応の評価を受ける資格がある。

それでいて、われわれの虚を突いている本質は、それらのすべてが一切「話」ではないというところなのだ。

しかもこれは、きっと意図的にそうして旧来の映画の約束を破ろうとしたものではなく、いつのまにか「話」というそれじたいと絶縁してしまった――絶交されてしまった――作り手から自然発生してきたものだ。

このことは、是非の以前に、常識的な感覚として「精神の健全さを損ねる悪影響がある」と言わなくてはならない。

映画を観る側は、ずっと何かしらの「話」を観せられているのだと思っている――その約束を大前提信じている――のに、実際にはそうでないものをずっとねじ込まれているからだ。

まるで病人が、病院ではないところに通院して、ずっと施術を受けているような感じだ。

この患者は、何か空回りした全身の「気持ち悪さ」を抱えて、よくわからなくなって、再びそこに通院してしまうだろう。

テレビシリーズであれ劇場版であれ、「エヴァ」は旧来の映画とは根本的に異なるものだ、映像と音響から「話」を創り出していくという文化芸術のそれではない。

映画館で上映したからといってすべてが映画というわけではない。

映画でなかったとしたら、これは何なのか。「話」がないのだとしたら、これは何なのか。

それは言うなれば、ひとつのパトス生成物、パトス実験、パトス装置、のようなものだ。

宗教組織が使う洗脳テープなどのほうに近い。

洗脳テープは映画ではないし、「話」でもないだろう。そしてきっと精神の健全さを損ねる悪影響がある。

3．90年代の神秘主義を背景として

90年代は神秘主義の時代だった。そのことは、当時を知らない若年層には直接察しえない。

また、当時を思春期として過ごした人にとっても、それ以前の時代との接続が視えず、どんな由縁あっての神秘主義なのか不明だろう。

古くさかのぼって15世紀からの大航海時代があったとして、そこから何百年も人類は「帝国主義」を生きた。帝国主義は第二次世界大戦、核兵器の登場によって終焉した。核兵器が登場することによって、いわゆる「抑止」、戦争が「できない」という新しい状況が発生した。戦争ができないのでは、帝国は帝国たる活動ができない。つまり1950年代、人類は帝国主義を脱却して資本主義へ移行した。資本主義は露骨な貧富の格差をもたらし、これに対する反発が「共産主義」の台頭をもたらした。いわゆる米ソの東西冷戦、その代理戦争、日本における「学生闘争」などがこの時代だ、1960年代から1970年代は共産主義に夢をかけた。しかしこのことは、ソヴィエトによる突然のアフガン侵攻で墜落する。共産主義は資本主義との徹底した差別化で成り立っていたところ、共産勢力は何ら平和勢力でなく、資本主義と同じ「侵略」をするのだということを、親玉のソヴィエトがやってしまったからだ。このことで共産革命に向けた運動家は肩身がいきなり狭くなった。そしてソヴィエト連邦が「崩壊」すると、社会科の教師まで首をかしげて「国がなくなるってどういうことなんだろうね」となり、共産主義はその夢を絶たれた。共産活動家は、いなくなるか、その一部は地下に潜伏していった。

共産主義に夢をかけていたものが断たれて、次に人びとは何に夢をかけたか。それが神秘主義だった。超能力者や心霊写真、占い師などが時代の脚光を浴びた。もちろん半信半疑なところはあったけれど、それは半分ぐらい信じ込んでいたという状態だった。

この神秘主義は、日本の場合、オウム真理教による地下鉄サリン事件で大量の冷や水を浴びせられることになり、一斉に「神秘主義はやめておこう」ということになった。

われわれが「エヴァ」を捉えるとき、このように捉えておくとわかりやすい、

「オウム真理教は引っかかってつぶれたけれど、エヴァはすりぬけて生き残った」

これはもちろん宗教やテロル思想に結び付けての捉え方ではない。当時の神秘主義という括りにおいての捉え方だ。80年代の恋愛は情熱的なものでなくてはならなかったが、90年代の恋愛は神秘的なものでなくてはならなかった。当時その神秘的なものにまみえることができそうにないと感じていた人は、一部はヨガや超能力に傾倒して、さらに一部は危険な宗教に取り込まれていった。

そして別の一派は、「エヴァ」に取り込まれていったということになる。男性ファンが綾波やアスカに向ける恋心は90年代の神秘主義的恋愛だと言える（同様の神秘主義的恋愛はそれ以降さまざまなオタク方面、たとえばギャルゲーと呼ばれる方面などで多数出現する）。

神秘主義以前の、たとえば共産主義者にこのことを言わせれば、彼らの文脈ではこうなるだろう、

「なるほどそうやって、エヴァというやつにオルグされていったのね」

あるいはこのように捉えるとよい、

「共産主義が失墜したあとも労働組合は残されたように、神秘主義が失墜したあともパトス信仰は残された」

4．もともとの福音書をどう「書き換える」ものか

福音書というとマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの四つだ。

この四つの名前はすべてイエスキリストの弟子の名前で、その弟子当人が、弟子の立場から「イエスキリスト密着レポート」を書き残したものだと言える。

同じ道中を共にしていた弟子たちのレポートなので、四つの福音書の内容はほとんど似通っている。

その内容はここで語るテーマではないが、いちおうざっくり申し上げると、

「どのようにキリストは地上に降下し、どのように旅をして奇蹟を起こしてまわり、どのようにパリサイ派を非難し、どのように教えを表し、どのように処刑され、どのように復活して天に昇っていったか」

という話だ。

その福音書のうち、ヨハネの福音書の冒頭にこうある。

【ヨハネの福音書】一章

1. 初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。

2. この言葉は初めに神と共にあった。

3. すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。

4. この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった。

もちろん元は日本語ではないので、元はこう書いてあるらしい、「ε ν α ρ χ η η ν ο λ ο γ ο ς」、もちろんどう読めばいいのかさっぱりわからない、調べると「エン・アルケー・エー

ン・ホ・ロゴス」だそうだ、アルケーというのが「原初」という意味で、「ロゴス」というのが「言葉」という意味。ロゴスはLogos だから、いわゆる logic ・論理、話、という意味でもある。

ロゴスというと、どこかで聞いたことのある人は、「ロゴス、エトス、パトス」というのを思い出すかもしれない。ロゴスが論理・話で、エトスが信頼、パトスが感情・感受性・共感ということになる。

パトスというと、「エヴァ」の有名な主題歌「残酷な天使のテーゼ」の中に、

♪ほとばしる熱いパトスで　思い出を裏切るなら

という歌詞がある。

もちろんそこまで作りこまれて生じた歌詞ではないだろうけれど、さしあたりここで「エヴァ」と「パトス」の接続に不自然さを覚える人は誰もいないだろう。「エヴァ」が全編パトスに満ちているのは誰でもわかる。

ヨハネの福音書を、わざわざヨハネ・エヴァンゲリオンと表記するなら、

・ヨハネ・エヴァンゲリオン［初めにロゴスがあった。ロゴスは神であった］
・新世紀エヴァンゲリオン［初めにパトスがあった。パトスは神であった］

と対比することができる。

もともとの福音書を「書き換える」のでなければ、新世紀福音書（エヴァンゲリオン）を言い張ることができない。

そこで、その書き換えというのが、
「神はロゴスではなくパトスなり」
という書き換えであれば、これは改めて「新世紀エヴァンゲリオンを言い張るものなんですね」と明瞭化される。

もともとのヨハネの福音書のうち、ロゴス・言葉にあたる部分を、さしあたり「感情」に書き換えてみよう。するとそれが、「新世紀福音書」の冒頭になるはずだ。

【新世紀福音書】
1. 初めに感情があった。感情は神と共にあった。感情は神であった。
2. この感情は初めに神と共にあった。
3. すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。
4. この感情に命があった。そしてこの命は人の光であった。

このように、「エヴァ」は印象そのままに、
「果てしない感情に "ハレルヤ" しろ！」「僕の感情だけがすべてだ」「無限の感情に閉じ込められろ！」
というやけくそのメッセージに明瞭化される。

わたし自身は、この勝手に書き換えられた福音書に、正当性も可能性も見いだせない。

わたしはやはりもともとの福音書のファンだ。書き換えられたものは、それが正しいと信じる人にとってはどうあれ、書き換えられたならばそれはもう「福音」ではないはずで、むしろその逆、「福音を破壊するもの」のはずだ。

5．エヴァは「話」ではない

ここで先に述べたことに再び戻る。

新世紀エヴァンゲリオンは、「神なるロゴス」を否定し、「神なるパトス」と書き換えるものなので、これじたいが「話」を為さないということがわかる。

話・ロゴスそのものを否定しているのだから「話」があるわけがない。

むしろ「エヴァ」は、<<「話を為さない」ことそれじたいが定義>>だと捉えるべきだろう。

感情だけがあって話がない、というのが正しい「エヴァ」になる。

よって、使徒という話もないし、エヴァ何号機という話もない。

ゼーレとかネルフとか、綾波とかアスカとかいう話は「ない」のだ。

ただフレーバーだけがあって、絵が動いていて、感情・感受性だけが運用されている。

もしこのことを、あえて「エヴァ的」に表現すると、次のようになるだろう。

感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情だけがあって話がない
感情感情感情感情感情感情
感情感情感情感情感情感情
感受性感受性感受性感受性
感受性感受性感受性感受性
感情感情感情感情感情感情
パトスパトスパトスパトス
あ情おあ感受あおおパ感情

こうして書き並べれば、これじたい「感情だけがあって話がない」という "ふうに" 見える。

"ふうに" 見えるだけで、実際にはコピーペーストしただけだ。

わたしはもともとの福音書のファンであって、新世紀と冠されたそれのファンではない。

よってわたしはこうしたものはひたすら馬鹿馬鹿しく思う。

一方で、単なる事実として、こうした文言をヒステリックに並べ立てられるだけで、それを「ドキッとする」と感じて、恐れるようなよろこぶような、情緒反応をする人が多数いることも知っている。

その「ドキッとする」とか「情緒反応」とか、それじたいのことをパトスと呼ぶ。

こういうものに「ドキッとする」等、大真面目にその情緒をいう人に対しては、わたしは「救いがたい馬鹿だ」とのみ述べる。

わたしからその人にかける言葉はない。

あるわけがない。

どうしてロゴスを否定してパトスを畏れ奉る人に、向ける「言葉」がありうるものか。

シンジ君と仲良くどうぞとしか申し上げられない。果てしなく続くパトスの劇場へどうぞ。

わたしは「もともとの福音書」のほうのファンなので、ロゴスの劇場におります。わたしの友人とはそちらでお会いしましょう。

6．碇シンジは何をやっているか：感情だけのバケモノ

「シンジ」という名前が「神児」に当てこすられているのは、エヴァのファンなら誰でもお察しだろう。

むしろイエスキリストが新約聖書において「神の子」だということのほうがはっきりとは知られていないのではないかと思われる。

ともあれ、その碇シンジが何をやっているかということだが、それは単純に、

・パトスの最大化・無限大化に向かっている

ということになる。

碇シンジがずっと膝を抱えてふさぎ込んでいるのは、何か理由があるわけではなく、ただパトス・感情の最大化に向かって、ずっとそうし続けているのだ。

何度でも申し上げるが、エヴァに「話」はない。話はないのだから、碇シンジがふさぎ込んでいることにも「理由」などはない。

ただただ、感情の最大化・無限大化に向かう、ということだけが行われている。

イエスキリストが例え話をもたらしてロゴス・話の最大化・無限大化に向かうのに対比して、碇シンジのほうはパトスの果てに向かうという必然の構図だ。

よって碇シンジは決して「話」を聞かない。

イエスキリストがパトスのほうに向かって発狂することなどあるわけがないように、碇シンジがロゴスのほうに向かって目覚めることなどあるわけがない。

ここで碇シンジは「話を聞かない、感情だけの物と化していく」ということになる。

物と化していくということはつまり化物であって、碇シンジはそれを観た人が誰でもわかるとおりに、

「話を聞かない、感情だけのバケモノ」

となる。

膝を抱えて孤独ぶり、けっきょく感情だけのバケモノだと明らかにされていく、その印象の目撃じたいが、エヴァのファンにとって「碇シンジ」のはずだ。

その感情の果て、無限大に至った感受性の向こうに、神話が啓けないか、ということを作り手は模索したと言える。あるいはそう願望したと言える。

何度も申し上げるように、使徒も〇号機も、綾波もアスカも、ミサトもゲンドウも、ゼーレもネルフも、人類補完計画もサードインパクトも、そんな話は存在していない。

すべてはフレーバーのみがあって、<<すべては碇シンジの感情の材料でしかない>>。

すべては碇シンジが感情の果てにいくための具材であって、どこまでも、何の話もない。

そして仮に、ここにこのことの「視聴者」がいるのだとすると、その視聴者は、大量のフレーバーに包まれて、碇シンジの果てしない「感情」に共感し、強い「感情」のみを体験するということになる。

何の話もないまま強い感情だけを体験する。

弟子ヨハネがイエスキリストによってロゴスの果てに導かれたであろうように、「視聴者」は碇シンジによってパトスの果てに誘われるだろう。<<その向こうに神話があるという願望にときめきながら>>。

ヨハネは感情ではなくただ神たる「話」を愛したに違いないように、視聴者は話ではなくただ神たる「感情」を愛したに違いない。

新世紀エヴァンゲリオンをあえて作品と言うならば、この作品は、永遠に碇シンジを「ぐずらせ続けるだけ」のものだ。これは当作に対する誹謗ではなく、むしろその原理が正しく貫かれているということに対してはいくらか称賛を込めたいところがある。

戦闘応召に対して、父親に対して、性欲に対して、同級生に対して、すべての自意識と自己愛において、抑圧される感情をひた

すら内部に膨張させていく装置として碇シンジは作中に表示され続けている。

何の話もなく感情だけが無限大に向かっていく。

ありていに言えば、これの作り手は、これと同種の精神状態に陥っている「オタク」たちを――「気味」の人まで含めて――共感作戦で呼び込めるということに確信と技量があったのだろう。彼らが印象的な映像・音響・フレーバー語彙にどれだけ弱いものかも、きっと当人として知り抜いていた。

碇シンジを新世紀のキリストに出来たのかどうかは知らないが、少なくともオタク（気味）の人たちに、「何の話も聞く必要ないよ」「ただ一緒に感情の果てにいこうよ」と強力に誘いかけたのは間違いない。

人知れず多くの人がその誘いに乗り、拡大していって、二十五年後の現在がある。

そして無自覚にこう言い続けている、

「話って無意味で」

「パトス（感情）が神ですよね！」

「すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」

7．碇シンジは何をやっているか２：フラストレーション

碇シンジは感情・パトスの無限大化に向かっている。

その無限大化の行程に、パトスの解消があってはならない、感情を目減りさせている場合ではないのだ。

よって碇シンジは、パトスが解消せず鬱屈・蓄積していくようにデザインされる。

あくまで、そういう「話」になるということではなく、ただ鬱屈・蓄積していく「だけ」だ。

どのようにその鬱屈・蓄積を為させるかというと、「フラストレーションによって」ということになる。

フラストレーションは「挫折」という意味だ。

通例に「フラストレーションが溜まる」という言い方があるが、これは「挫折によって感情の鬱屈が蓄積する」という意味だ。「やり場のない感情」と言うとわかりやすいか。

とはいえ「話」があるわけではないので、碇シンジは漠然とその「挫折」と鬱屈の蓄積によってフラストレーションを溜めていく、そういう映像がだらだらと繰り返される。

事実の照覧は何ら必要ではなく、ただ、

「僕は何をしてもダメなんだ」

「ぜんぶ僕のせいなんだ」

「何もかもがどうせ裏目に出る」

「誰も僕のことを必要としていない」

等、事実であろうがなかろうが、自分でそう思い込んで反芻していけば――そういうことにしておけば――そのぶんフラストレーションは溜まる。

ここでまた、「視聴者」の存在を仮定すれば、視聴者はある種の性質において碇シンジのパトスに共感して引き込まれていく。

言うにもいささか憚られるが、つまりは "根本的に挫折して生きている人" に共感を呼ぶのは構造としていかにも当然だ。

碇シンジは「話を聞かず、挫折を繰り返す」という自動的な装置であって、解消されることのないパトスを蓄積していく。

一時的にその解消をギミックとして与えられることはあるが、その後は必ず倍にして回収されるようになっている。

あくまで、そんな「話」があるわけではなくて、ただそういうふうに絵を動かし、そういうフレーバーだけ漂わせている、ということが示されるだけではあるけれども。

こうして碇シンジは、根本的に挫折して生きている人たちに「神話がある」と触れ込んで、呼び込むイコンと化す。ただしけっきょく神話はない。「話」がないのだから神話があるわけがない。あるのはあくまで感情の無限大化だけだ。「それじたいが神かもしれないじゃない」という、投げやりな思いつきが執拗に実行されたと見ていい。

その感情の無限大化がどうなるのかについては、たぶん作り手側も「さあ」と知らない。このことに作り手の執念はあっても意欲はない。作り手側も「やってみたかった」という感情だけがあるのであって、何をやったかという話があるわけではない。これを作ることじたいに話がないという点で、取り組みは徹底していると言える。

8．「話」ではありえないことの端的な証拠

新世紀エヴァンゲリオンに「考察」を向けて愛好するファンたちは、作中に示される台詞や映像が、何かしらの話の「断片」だと前提している。

ひとつの「話」があり、そのすべてを表示はできないから、その断片だけが思わせぶりに表示されている、それがエヴァの「メッセージ」だと捉えている。それはもとの話を「読み解ける」ものだと思っているのだ。

けれどもわたしがいま唱えているところはまったく逆だ。

作中に示されているのは何らの断片でもない。

そのときごとに思いつかれたパトスの形状でしかなく、これらがひとつの命ある形に整合することなど決してない。

一体の像を地面に投げ落として、それが砕け、それが地中に埋まり、後の世に遺跡として掘り出されたなら、その断片から全体像を導き出すということを考古学者たちは為しえよう。

けれどもここで地面に投げ落とされたのは一体の像ではなく、無数の「感情的なだけの形」だ。似通ったフレーバーがこすりつけられているので、さもひとつの何かに結ばれそうに期待したくなるが、誤った見込みに過ぎない。

むしろ、すべてのシーンとカットが、そのときごとの感情的なだけの形でしかないということがこの作品の誉れであって、これらがひとつの「話」に綯い合わされると夢想することこそ「エヴァ」への冒涜となる。

一つの話・ロゴスに結ばれるのであればそれは新世紀の福音書たりえない。「話」たりえる福音書なら、もともとの福音書のままでよいではないか。

考察などせずとも、「エヴァ」がそもそも何ら「話」たりえない証拠は端的に無数に見つかる。

まずエヴァ〇号機なる機体を設計・製造しているのが誰なのか見当もつかない。三菱重工が設計・製造しているというような様子はない。

不明の誰かが造って、不明の誰かがいきなり「持ってくる」みたいな感じだ。

かといって摩訶不思議な機体でもなく、「充電」というわかりやすい動力源を持っている。

どのような電圧で、どのような電荷量を蓄電できるのかもわからない。蓄電するならバッテリーがあるはずだが、どのようなバッテリー液を内臓しているのかまったく不明だ。電力量はジュール・仕事量と同じなので、消費される電力量以上の仕事はできない。つまりエヴァ機体の最大出力はバッテリー上限まででしかありえず、搭乗者がヒステリー奇声をあげても何の関係もないことだ。

どのメーカーがどのように設計して製造したものか不明で、素材も不明だ。これを「修理」するというのはわけがわからないし、誰が修理するのかというのはさらに不明だ。

ＬＣＬ溶液というのも誰が何から作っているのか不明だ。輸送手段も不明だ。そもそも地球上の工業生産が大きく破壊されたのにエヴァ周辺だけ潤沢に工業品が供給されるのはおかしい。「シン・エヴァ」においては自給自足の風景がやたらアピールされるが、郷愁を誘うオンボロ車のガソリンだけは問題なく供給があるらしい。日本の備蓄が残っているのか、それとも海外と原油の交易を続けられているのか。クラッキングをするコンビナートは残っているのか、それを輸送して小売・ガソリンスタンドに供給するシステムは残っているのか。

イエスキリストがある宴で真水をぶどう酒に変えるという奇蹟をもたらしたことのような、それ以上のことが各方面で毎日常時のこととして起こっていなければ、ネルフにあれだけの工業品は供給されえない。

不明の「結界」みたいなものをもたらす巨大な黒光りの棒が、いきなり発明されいきなり製造され、いきなり運搬され、いきなり運用されている。

そんなものが運用できるならそもそもネルフ本部をその結界で守ればよかったではないか。あの黒い棒を運んだ重機のパワーはエヴァ〇号機の機体出力などをはるかに超えているだろう。

すべてのことは、ゼーレと呼ばれている黒い板どもが段取りしているというような冗談じみた設定が押しとおっていく。その板どもが段取りをしてもかまわないが、板どもが小包の一個だって輸送できるわけではない。板どもが段取りをするにしても、板どもが使役する何かしらの業者や部隊が必要なはずだ。そしてそちらの業者や部隊のほうが実績から見てネルフより巨大なはずだ。

「パターン青、使徒です」というが、どういうシグナルでその使徒を同定しているのか不明だ。その同定装置を作った人やメーカーはさらに不明だ。シンクロ率が０％でも４００％でも構わないが、そのシンクロ率を測定する原理と機材が不明だ。誰が造ったのか、誰が修理とメンテナンスをするのか。測定される数値の信頼性と誤差範囲は誰が担保しているのか。

ネルフの予算はどこから出ているのか、そもそもネルフは法人なのか、それとも官公庁なのか。法人なら代表役員は誰なのか。私設の軍隊だとしたらますます財源はどこなのか、司令官の階級は何で、オペレーターたちの階級は何なのか。ネルフの意思決定は誰がしているのか、結社の名簿はどこにあって社則はどうなっているのか。ゼーレが非開示で意思決定しているのだとするとゲンドウが業務命令を受ける根拠は何なのか。

「使徒」が襲来するが、なぜそれが「使徒」と称しうるかが不明だ。使徒なるものはまったく自己紹介をしないし政治的要求も交渉もしない。それが「使徒」なるものだとゼーレに教わったのだとして、ゼーレなる板どもがどこからそれを知ったのか不明だ。「使徒」の数は一定でそれを撃退したら敵勢力は途絶えるという情報もどこから得ているのか不明だ。

使徒が〇th インパクトをもたらしに来るとして、なぜ使徒側にその意思があるのか不明だ。仮に聖書に結び付けて「神」なるものが背後の主体としてあるにしても、それがあるのだという言葉を預かった預言者がいない。エヴァにはモーセもエリヤも出てこない。預言者の存在なしにいきなり神側の情報が湧いて出てくるというのは意味不明だ。すべてをゼーレとかいう板に押し付けるのもさすがに無理がありすぎて失笑が湧いてしまうだろう。「すべてシナリオ通りに」とすでにコンセンサスが取れているなら、何の議題もない会議を装った「板トーク」みたいなことはしなくていい。

こんなことを言いだしたらキリがない。そもそもシンジもアスカも綾波も、「パイロットはみんな十四歳ね」ということに明らかな無理がある。自動車の免許も取れないのに。

まして、人類存亡の危機が掛かっているのに、その十四歳のパイロットたちをのんびり中学校に通わせているなどありえないことだ。消防署に詰めている消防官たちだってもっと危機感がある。スクランブル発進のときパイロットたちが「いま、学校に行っています！」「しかも彼らは徒歩通学です！」なんて馬鹿げたことがあっていいわけがない。プラグスーツもエントリープラグ

も誰が造っているのかわからない。ネルフの規模に比べてあきらかに従業員が少なすぎる。

このように、「エヴァ」はＳＦでも何でもないのだ。かといってファンタジーとしての原理も持っていない。

だからこれは「話」ではないのだ。

本当に「感情」しかない何かであって、「感情」のために絵が動き、それにさまざまな用語やセリフが「フレーバー」として焚きこまれるというだけだ。

もちろん本当には、これが「話」として破綻しているということに気づかないような作り手はいない。いくらなんでも露骨すぎて、この破綻に気づかないのではさすがに単純に知的障害のたぐいだ。

だから、気づいていながらやっているのであり、さらにはわざとやっているのだ。

わざとやっている、つまり、初めから「話」とは違う何かをやっているということ。

本当に初めから「感情」だけをやっているのだ。

すべて碇シンジに見せかけた感情の具材でしかない。

いい感じに感情が高まり、挫折蓄積してその圧力を上げていくのなら、何でもかまわない。両足がとつぜんイモムシになっても構わないし、とつぜん舞台がそろばん教室になっておばさんにディープキスされるのでもかまわない。死海の塩水を飲んでとつぜん背中に十二枚の羽が生えて「約束のときが来た」と言って父親を酵素分解してもいい。「マグダラ・サーペントが制御を受け付けません！」と大声を出しておけばいい。

「話」が無いのだから何でもいいのだ。話が無い以上、その話から逸脱するということもないし、その話が壊れるということもない。

ただし実際には、そこに作り手側のフレーバーへのこだわり、蓄積されるフラストレーション感情の種類へのこだわりが強烈にあるので、その「こだわり」において、当作群は話ではないまま一定のまとまりを皮肉にも得ることになる。

その「こだわり」はどのような基準になっているだろうか、そのことについて次に述べる。

９．パトスの果てに「無上の射精」を願望する

新世紀エヴァンゲリオンが制作された動機は極めて純粋で、ただただ「最高の射精」を追求している。ないしは希求しており、願望している。

すべてのフレーバーと動く絵の展開は、パトス・感情の果てにいくための具材に過ぎず、その感情の果てというのも、願望する「無上の射精」を得るための材料にすぎない。

本当にわかりやすく言うと、ありとあらゆる条件を最上の状態に設定して、この上ない最高の「ドピュッ、ドピュッ」をやりたいのだ。

それ以上に至高の体験はないという、異様に強い確信が、まるで本人の意思を超えて出てきたかのように、ここだけは示されている。

すべてはこの作り手の希求する「無上の射精」に向けての戯画にすぎない。

これは悪口で言っているのではなく、この点では本当に「エヴァ」は意図的に・明瞭に作られているのだ。

作り手の側としては、すべての「話」と絶縁して、本当に自分が知っている唯一のことを描こうとした。それは意欲ではなく、逆に意欲がマイナスの底にまで至ったものだ。

それは何の「話」でもなく、無上の射精を思い描いた戯画にすぎない。

この戯画に、オタク（気味）の人たちが寄ってくることは「案の定」とは言え、それにしてもタガが外れたように寄ってくるのを見て、同族嫌悪と軽蔑を覚えたというところが作り手側の心情ではないだろうか。

ありていにいうと、アニメに「話」を視ている人が集まったのではなく、アニメに「射精」をしている人が集まったということ。

女性の場合も、物事に「話」を視ることができず、「オーガズム」することしかできない人が集まったと言える。

作り手も視聴者も、等しく「ロゴスが与えられず、何の話も視えない者」が集まり、当然のごとく、「パトスの果て、感情の果て、射精とオーガズムに同道した」ということ。

多くの視聴者は、振り切った作り手の側よりウブで、ロゴスを与えられないパトスの物体でしかない自分のことがよくわからず、エヴァを介して作り手の側へ甘えにきた。

そこで作り手が、おそらく内心ではその視聴者たちに同胞としての好意はまったくもたないまま、それはそれとして予算のままに無上射精の戯画を制作した。

その戯画が、恥も外聞もなく純粋に性的嗜好・いわゆる性癖、そのパトスを果てしなく開示するので、視聴者たちは自分たちのことも「これでいいんだ」と思うようになって歓喜した。

彼らにとって、「ぐずり続けて、パトス爆発する」のがセックスだったが、そのことが「これでいいんだ」と肯定されて歓喜した。

現代ではいわゆる「性癖」と言われている、性的嗜好、ないしはその偏執化について、具体例を示していくほうがこのことはわかりやすいかもしれない。

まず主人公とヒロインたちが十四歳なのは、作り手にとって、「十四歳のときが性欲・リビドー・射精快感のピーク」

と確信されるからだ。

一方でいわゆる「おねショタ」というようなジャンルにも一部あこがれがある。そこで碇シンジには葛城ミサトがあてがわれる。

もちろん「話」の中でそうなったのではない。

おねショタのために葛城ミサトが設定されたのであって、葛城ミサトの話が先にあったわけではない。

そして綾波レイはまったく偽装もされていないエディプス・コンプレックスそのままだ。綾波レイは母親の複製だから、碇シンジは母親そのものと結婚しようとする。

ところが母親には父（この場合は碇ゲンドウ）がいるので、自分は母親のことを性的に奪取することができない。

そして少年は、この父を倒せるように力をつけていこうという道筋、父親を倒そうという道筋に進む。

このように、フロイトが提唱したエディプス・コンプレックスの、まるで模範例として綾波レイは碇シンジにあてがわれる。またこの「綾波」は母親として、ユングが唱えるところのグレートマザー元型としても作中のクライマックスに現れてくる。ただしそのような戯画が示されるのみであってそこに「話」はない。

アスカはドイツ出身で、シンジの性格・人格から真反対にあることもあり、わかりやすくシャドー（ユング元型のひとつ）が投影されている。

このシャドーから湧いて出たアニマ（これも元型）のようにアスカは描かれるのだが、このあたり作り手の意図にたいした意欲はなく、雑で、それっぽく登場させはしたものの、その元型の維持は投げやりにされる。

すべてはあくまで無上の射精のみを求めてのことだ。

碇シンジを通して自己実現に向かうという傾向はまったくない。

ここが強調して知られるべきことだが、碇シンジを通して自己実現に向かうというたぐいのことを「一切なしにしよう」と断じ、またそのことを本当に徹底できるところに、この「エヴァ」の特異性はある。

一切の、そうした魂の歩み、「話」たりうるものは生じさせないというのがエヴァの凄みだ。

なぜそうした話のたぐいを「一切なし」にするかというと、それらはしょせん射精の快楽には不純物にしかならないからだ。

ありとあらゆる元型を心理学者ユングがそれっぽく解明して見せたとしても、

「いいえ、僕のチンチンのドピュッのほうが上です、それを上回るものなんて絶対にないですから」

とうずくまって射精してみせるという、それがこのエヴァという戯画の強固な立脚点だ。

すべての「心理」に、わずかも向き合わない・克服しないという逆転の決定こそがこの「エヴァ」の説得力だ。

葛城ミサトが「おねショタ」だったとして、綾波レイがエディプス・コンプレックスだったとして、アスカが「ツンデレ」だったとして、それらのすべては、

「これに射精したら相当気持ちいい」

ということで画面に持ち出されているにすぎない。

すべては無上の射精に向けて蓄積されていっているものにすぎない。作り手にとってはきっと生涯何の話もなく、ただ無上の射精だけが本当の「夢」だったのではなかろうかと想像する（ただしあくまでそれはわたしの想像にすぎない、事実なんて最後まで誰にもわからないだろう）。

１０．補足、深層心理学方面との乖離について

蛇足かもしれないがいちおう付記しておく。

「エヴァ」は心理的なすべてのものに「向き合わない」ということを本にしているので、精密に見ると深層心理学が唱えるところの文脈からは乖離する。

たとえば綾波の出どころはエディプス・コンプレックスに違いないが、エディプス・コンプレックスは父親の権威によって母親が「与えられない」ということであって、このエヴァのように母親の複製が碇シンジに「与えられている」という異様な状況はエディプス・コンプレックスのむしろ破壊に当たる。

アスカを一種のシャドーかアニマと見るにしても、シャドーの側から「ぐいぐい来る」というようなことは心理学の唱えるところを逸脱している。

グレートマザー元型にしても、それは取り込んで守るも同時に閉じ込めるものであって、思いのまま外界をくれるような存在ではない。

深層心理学に引き当てうる心象描写があったとしても、そのこころの事象に向き合うのではなく、「設定」で台無しにしていくのがエヴァの本筋だ。作中のすべては一切の話を為さないパトスの蠢きであって、それ以外の権威を認めないのであるから、つまりこころの性質や構造といったものも認められない。

すべての心理さえ設定で台無しにして、それでこそパトスの極みの射精がありうるというのがエヴァの描写だ。なんでもかんでも母親とペニスと射精とみなしたフロイトもかくや、そのフロイトの学門じたいさえ碇シンジはパトス射精の材料にするだろう。

この段は深層心理学との整合性についての補足だが、そもそも深層心理学に関係があるわけでもないので蛇足だ。

１１．無上の射精①／蓄積されたパトス

何の感情もなく射精することは、きっとこの作り手にとって「快感の低い」ものに違いない。

逆に、「強い感情であれば何でもいい」、激しい感情があればそのときの射精はとにかく気持ちいいんだ、という一種の確信のようなものが、この「エヴァ」からはにじみ出ている。

女子中学生の肢体にパトスが昂じる。

それが同級生ということにパトスが昂じる。

女性の下着姿や、セミヌード、またその窃視にパトスが昂じる。

女性の身体のライン、尻や股間、胸などにパトスが昂じる。またそれを浮き立たせるスーツにパトスが昂じる。

一つ屋根の下で同棲という環境にパトスが昂じる。

巨大なロボットの「力」を振り回すのは、それじたいにパトスが昂じる。

激しく弾丸が飛び交い、騒音と振動がするのは、それじたいにパトスが昂じる。

エースパイロットという地位と承認欲求にパトスが昂じる。

人類補完計画等、語彙をフレーバーとして吸うとパトスが昂じる。

おっかない敵と脅威に対しては、それを恐怖するというパトスが昂じる。

いやだよ、いやだよ、やりたくないよ、といやがることじたいにパトスが昂じる。

父親や同僚を恨んだり、呪ったり、憎悪・ヘイトすることにもパトスが昂じる。

痛みや苦しみにギャーと否定的な叫びを発するのはパトスが昂じる。

大声を出すことじたいにパトスが昂じる。

パトスで顔面をひきつらせることじたいにパトスが昂じる。

自己否定にもパトスは昂じるし、自分がチヤホヤされることにもパトスが昂じる。

馬鹿にされることや、自分が否定されることにパトスが昂じる。

こうして可能な限りのパトスを十四歳の碇シンジのペニスに積ませ、綾波でもアスカでもミサトでもマリでもいいので「ドピュッ」としたら、「それは狂おしいほど気持ちいいはずだ」と作り手は追求している。

当時の男性ファンはこれをおおいに「オカズ」にしていたはずだ。「エヴァ」という全体に興味があろうがなかろうが、強力なオカズの引力においてこれを「観ずにはいられない」と引き込まれるところがあったはず。

90年代の、ある種の切なさのムードの中で、神話へのあこがれも含めて恋人の幻想に懸けた人も少なくないとは思うが、それはそれとしても、背後にこのように「ペニスにパトスを積む」という制作意図があったことを今さらではあるが確認しなくてはならない。「強い感情であれば何でもいい」「激しい感情があればそのときの射精はとにかく気持ちいいんだ」。

「シンジ君」のペニスにパトスが積まれるのと同調して、視聴者男性のペニスにもパトスが積まれていった。ここまできて逆に綾波やアスカを「オカズ」にしたことがないという男性ファンはありえただろうか。

そしてそのことは、ファンたちが「エヴァ」を互いに "神話" のごときに言い合って色めいたことと、当然の矛盾をしているのではないだろうか。

１２．無上の射精②／最低の男性であるべき

このエヴァおよび碇シンジに、作り手側の最大のこだわりが込められている点があるとすると、それは碇シンジが「ぐずりつづける」というところだ。

一切の話を聞かず、ぐずりつづけ、一番みっともなく、汚らしいことを言い、それでいてベストのヒロインたちに囲まれて、構われていたい。

碇シンジは、およそ男性として知りうるかぎり「最低」のほうへ行こうとする。性的な存在としては権威が最も低いほうへ自ら向かう。

なぜそのようなことをするかというと、つまり、

「この最低な僕のペニスをこそ、あなたの舌でペロペロしなさい」

ということを碇シンジは要求しているのだ。

男性として最低な存在である自分、この自分にこそ、ベストのヒロインは膝をついて、完全な愛をもってセックスと奉仕を捧げなくてはならない。

もちろん女性の側としては根本的に耐えがたい不本意で、不快で、屈辱だろう。

だからこそだ。だからこそ、女性側の破滅的なパトスも加わって、そのときの「ドピュッ」は狂おしいほど気持ちいいはずだ、と作り手は追求している。

この点については、碇シンジの態度の表明は徹底しており、明瞭で、

「ぜったいにここから動かないぞ」

「ぜったいに、この最低の僕にこそ、女の奉仕をさせるんだ」

「何がなんでも、君たちは、最低の僕にこそセックスを献じなくてはならない。僕はぐずりつづけるから、ぐずりつづける僕に君

たちがセックスを与えるんだよ、それだけしか無上の射精にたどり着く方法はないんだ」

このことについては碇シンジは本当にまったくぶれず、動かないという表示がある。

作り手はよほど、このことこそが無上の射精の「肝」なのだと確信しているのだろうと思われる。

この部分だけは本当に圧巻というほどの確かさだ。

これは通常のハーレム願望の裏をかいている。

通常のハーレム願望は、何かしら強いオス、あるいは何かしら高い権威があって、女たちがそれに奉仕するというヴィジョンの願望だが、碇シンジのそれは、最も弱いオス、最も低い権威において、女たちがそれに平伏・奉仕するというヴィジョンなのだ。

もちろんそんなことは栄光や愛の原理において成り立ちようもないのだが、成り立たないなら成り立たないで、それを女たちが成り立たせてくれるのを、ずっとぐずりながら待ち続けるというのが碇シンジの自己決定だ。

そのことからわずかでもずれたら、もう無上の射精は得られないのだという強い確信がある。

周囲にまともな男たちや、うつくしい男たちがいたとしても、「だからこそ」女たちは最も醜い僕にそのセックスを捧げる必要がある。

他のまともな男を愛するほうが正しかったとしても、その正しいことの先に無上の射精はない。

最も誤ったほうへ、最も成り立たないほうへ向かうことでしか、無上の射精はありえない。

もちろん碇シンジおよびその作り手の無上の射精になんか誰も興味も関心も持ちようがないが、それも「だからこそだ」となる。

もちろん作り手の側は好き放題に設定をとりつけて、すべてのヒロインを碇シンジと寝させることができる。

だが奇妙な話、それではだめなのだ。設定に押されて女たちが最低の男に性的奉仕をするのでは無上の射精へ至れない。

むろん、碇シンジの側がヒロインらにセックスを乞うてもいけない。

乞うたものに応えられて与えられるセックスとその射精など、どれだけつまらないものだろう。

母親が母性のうちにそのペニスを愛撫してもいけない。

マザーファッカーごときが無上の射精に浴せるわけがない。

どうやっても成り立たないこのセックスと射精に向けて、パトスの向こう側から、奇蹟の主みたいなものの手がニュッと伸びてきて、すべてのヒロインを碇シンジに奉仕させるというようなことでしか、無上の射精には至れない。

碇シンジにかこつけた、無上の射精を乞うペニス、そのペニスを愛でたもう超越者が、パトスの向こう側にいるや否や、ということがテーマになる。

ぐずりつづける不快な、感情のバケモノたる碇シンジのペニスを、性的に愛でたもう神などいるだろうか。いるわけがない、と一般的には思える。であれば一般的な神についての、福音書を書き換えるしかない。

ぐずりつづける不快な感情のバケモノたるペニスを愛でたもう神、その最上の神話がもしあるなら、オタク（気味）の人たちは自らを誇ってその神殿に馳せ参じるだろう。

１３．無上の射精③／天国

福音書は書き換えられ、「パトスは神であった」とされる。

ここで、パトスを昂じさせていくことじたい、神に対する祈りとなる。

天国に招き入れてもらうための祈りだ。

そしてその天国とは、「無上の射精」に他ならない。

狂おしい、これ以上ない絶頂と、果てしない満悦。

こういったものの作り手は、クリエイションをしているわけだから、そのモチベーション、および原動力となるモチーフということに向き合わざるを得ない。

そしてどのクリエイターも、一種のリビドーのようなものを、その原動力にありうると認めている。

ただしそのリビドーの「ような」ものが、そのまま一般に知りうるリビドーで済むわけではない。

クリエイションの動機を突き詰めていくと、それはやはり何であれ「無上のものに奉じる」ということでしかなくなってくるのだが、この無上のものというのが、ベストヒロインに奉仕されての「射精」だということで、「エヴァ」は作られている。

少なくとも、パトスの果てに無上の射精を得んとする、そのモチベーションでここまでの「エヴァ」が実作されてきたという事実は誰だって認めざるをえない。

仮にロゴスのひとかけらを与えられたとしても、それは彼の射精の「天国度」を著しく低下させただろう。

逆に、パトスに踏み入るたび、彼の射精の「天国度」は増していった。あるいは、増していくだろうという光景が確信されていった。

天国から遠ざかるロゴスに踏みとどまる理由があるだろうか、また天国に近づくパトスに歯止めする理由があるだろうか？

最低な碇シンジであれば最低な碇シンジであるほど、その射精の天国度は向上していく。

すべての話を踏みにじるパトスが、ひょっとして「最低」な何かであったとしても、その最低な何かが射精の天国度を増していくじゃないか。

むしろこのことの果てにこそ天国へ至る道があるはずだ。

そういう形で「エヴァ」は作られている。純粋に、射精の天国度に帰依するのみの戯画を記したところ、むろん何の話でもなく、一種の入念な「射精風景」が生じたという具合だ。

実際にこのエヴァを射精風景にした男たちは多かっただろうし、オーガズム風景にした女性も少なくないだろう。それは当時社会現象とまで言われた。

男女やセックスという「話」が完全に失われ、男女やセックスという「パトス」こそが天国・楽園なのだとされる、現代に至る大きなトリガーのひとつとしてこの「エヴァ」が二十五年前にあったと言える。

１４．「エヴァ」というフィクションは存在していない

奇妙なことだが、ここまで話してきているアニメ「エヴァ」は、ノンフィクションであってフィクションの作品ではない。

そのことを示すように、エヴァは途中で実写映像に切り替わり、何であれば、そのエヴァの視聴者・ファンをスクリーン上に映し出すという表現もしている。

いわゆる「メタ要素」として見せつけられたような印象のものだが、これはそうではなく、そもそも「エヴァ」というようなフィクション作品は存在しておらず、はじめからすべてノンフィクションのみが進行しているということだ。

何の「話」もないのであるから、それはノンフィクションでしかありえない。

エヴァなんて話もなければ使徒なんて話もない。シンジやら綾波やらアスカやらいう話もない。ゲンドウやらゼーレやら人類補完計画やらいう話もない。

ただ、パトスの亢進というノンフィクションだけがそこにある。

徹頭徹尾、パトス亢進というノンフィクションしかそこにはない。

一種のクラブ・ハウスの映像が、そのクラブ・ハウスのスクリーンに映し出されたとして何か驚くことはあるか。あるいは何かしらの宗教団体の儀式が、その儀式の堂のスクリーンに映し出されたとして、何か驚くことはあるか。野球の球場なら、スクリーンにその野球が映し出されることはいつものことであって誰も驚かない。

「エヴァ」もそれであって、それはいわば「パトス亢進と無上射精を追求する会」の会場みたいなものだ。

その会場の様子が、会場のスクリーンに映し出されたとしても何も驚くことはない。

パトスが亢進する、そんなアニメが「みんな大好きでしょ？」と作り手の側は言っているわけだ。

「アニメが "話" だなんて言った覚えはないよ」と、わざとらしく表示しているとも言える。

パトスが神であって、パトスを積んだペニスの無上射精が天国であるなら、そこに何の「話」が必要だというのか。

そこに映っていたのは、理論上は聖堂の内部と、そこに祈りを捧げる人びとという光景だったはずだ。

仮に「パトス亢進センター」の視聴覚室なんてものがあったとしたら、きっとそういう自分たちの光景があって当たり前のはずだ。

こう考えてみるとわかりやすい。「エヴァ」なるプロジェクションがあったとして、そのパトス亢進作用が「好き」という人は、実際、他の「映画」がよくわからないはずだ。

これは厳しいところだが、破滅からは立ち去るという当然の勇敢さを持つ人においては、堂々と冷静に考えられなくてはならない。

たとえば「バック・トゥ・ザ・フューチャー」を観ても、それはなんとなく「アツい」というぐらいに見えて、どういう話だったかというと、「よくわからない」「うまく言えない」はずだ。

このことについてはまた後に触れる。どちらかというとこのことのほうがわたしの話すことの主題だ。

「エヴァ」というフィクション作品などは存在していない。

よりわかりやすく言うと、それは一種の性風俗だと捉えればいい。

性風俗を描いたアニメではなく、アニメーションを用いた直接の性風俗だ。

だから綾波は「気持ちいいの？」と視聴者に訊いたはずだ。

それも性風俗のプレイの一環として。

そして次回へのお呼びとして、「サービス、サービスぅ」ともファンは聞きなれているはずだ。

このように徹底して、「エヴァ」なるフィクションも話も存在していない。そしてこのような性風俗を新しく産み出した作り手はその意味においては疑いなく奇才だと言えよう。

１５．閑話

はーしんど。なんでファンでもないおれがこんな遠大な話をしているんだ。

まあ、ファンじゃないからこそ、このことが正しく語れるということなので、しょうがないけれどね。

それにしても、エヴァをアニメーション性風俗と捉えると、おれだってそれを好きになっておかしくない。

その意味では確かに、なんとなくアニメの再生ボタンをぽちっと押すことに気楽さはあるな。

ただ、それでもそんなに続けられるかというと、うーん、おれはダメだ。

そもそもシンジ君がおれの性的嗜好から遠すぎる。

おれはもともとセックスにいわゆる性癖のない者だ。

趣味としてはロリコンを言い張っているのだが、実際に女子中高生を目の前にすると、
「いやいや……」
と冷淡になってしまう。
空想するロリコンと実際のティーンネイジャーの女の子は違うからなあ。
十代の女の子なんて、ちっちゃなパトスでぷるぷる震えるぐらいしか機能がない。
それがカワイイと、パトスを亢進するボーイズもいるのだろうが、それはボーイズの側もちっちゃいパトスで震えられるからであって、おれはもうさすがになあ。
女子中高生とのセックスは何か、茹でただけで味をつけていないシイタケを食べる、みたいな感触がある。
無垢といえばそうなのかもしれないが、本当にまだ何もないので、見ていてヒヤヒヤするというか、ひたすら心配になる。
何もない女の子が、本当に韓流アイドルのブロマイド（なんて古い言い方だ）を見て、本当にワーと食いついているのを見ると、ひたすら、「これからより豊かなものがこの子に降り注いでくれますように、青春以上の青春が彼女を満たして彼女を強くしますように」と祈ってしまう。
綾波やアスカに封入されているパトスは、作り手側のパトスであって、当然だが十四歳の女の子のパトスではない。
実際の女性の身体というのは、もっとゴツゴツしていて、もっと動かなくて、もっと重たくて、もっとしんどいものだ。
女性の身体ってものすごい「しんどい」よなあ。そのままだと。
それにまともな魂が与えられて、しんどくない身体になるのであれば、もう何でもいい、とにかくハッピーだし、そのことのためならおれの学門だって無条件で協力しちゃうよ、と思ってしまう。
われながら完全に関係ない話をしてしまった。
おれは性風俗は好きなのだろうか？　そっち方面に詳しくないので、おれは正直よくわからない。
少なくともキャバクラの類は、行きたいと思った試しがない。
行くとしたらどうせまたおれ自身の学門のために行くとかいうキチガイ行動になるんだろうな、おれは。
むかし、部長に連れられて六本木の会員制のところに行くというようなことは毎日のようにあったが、そこでもおれはけっきょく手品をしたり何やかやと、おれ自身が営業しているありさまだった。
いまキャバクラに行ってもどうせ、おれがなんとかして女の子を笑わせるというだけの、ナゾの挙動になってしまうのだろう。
（ちょっとイメージしてみただけでバテた、やめておこう）
ややこしいパトスを身の回りに置きたいとはまったく思わない。
おれは愛の話だけに囲まれていたいのだった……
エヴァを性風俗として楽しむのは悪くない、のかもしれないが、そうなると正直シンジ君が邪魔だ。
こいつを殺したらちょっとはマシな映画になるのにとずっと思いながら観ていた。
しかしよくもまあ、こんな「考えるだけでムカつく」というような奴をデザインし、それを主人公にしたものだ。単純にすげえと思う（おれはこんな気分の悪い主人公を五分だっていじれないだろう）。
しかもその主人公がムカつくということのみが作中にあって、何の話も本当には無いのだものな。
何がなんでも「無上の射精」をする、そのことから絶対に動かない！　という、チンコ事情のＭＡＸを堂々と表示してまったく腰が引けないということもすごいと思う。
そこまで何もかも、射精しかないかね、わかるようなわからないような、少なくともおれは女がゴールでは絶対にない。
おれは話の中で射精するのが好きで、パトスの中で射精するのは、好きでないというより、もう身体が反応しなくなってしまった。
おれはやさしいのだ。
女がパトスの中でオーガズムを得て、どんどん話・ロゴスには帰ってこられなくなる、そのときの悲しそうな、絶望的な、それでいてスイッチが入ってもう戻ってこられないのというような、その眼を見てきたおれは、ひたすら「もうそんなもの二度と見たくない」としか思えなくなった。
「エヴァ」を楽しく観られている人は、残念ながら、「話」が視えていないタイプだ。
オタクがどうこうというわけじゃない、「話」が視えないタイプだ。
ロゴスが視えなくてパトスしか視えなくなっている。あるいは生まれてからずっとその状態にある。
韓流アイドルのブロマイドに本当にワーと食いついている女子中学生みたいにだ。
おれはむかし、友人に勧められてエヴァを観せられたとき、「意味がわからなさすぎる」と言って耐えられず、二十分ぐらいでそれを止めてしまった。
二十五年経ったいま、おれは、新劇の序を観て、破の途中で、「あ！」
と気づいて、それ以降、エヴァを観るのがしんどくなくなった。
観ているが、話は聞いていないからだ。
ありもしない話を聞こうとしていたからおれは「？？？」となっていたのだ。
何か話があるわけではなくて、パトスがバキンバキンなっているだけだ。
（何かわからんがバキンバキンというオノマトペを当てた。バキンバキン）

そのパトスを眺めているだけなら、確かに何ということはない、好きな人は好きだろうなということで収まる。

おれもスケベ男なので、アスカのセミヌードや股間をぼんやり眺めているのはそれなりに楽しい。

別に綾波でもいいし、ミサトさんでもいいし、そこのところは見栄えがきれいなら誰でもいい。

眺めるだけの女の股間を「誰」というものでもないだろう。

だがおれは敢えて当たり前のことを言っておく、「チンコに来るもの」が女というわけではない。

おれは女の身体がチンコに来るということじたいがないのだけどね。

眼はいくがチンコには来ない。

チンコに来るという現象はどうやらもともとおれには無いみたいなのだ。

上玉の女の身体は各所「かわいい」から、見ていて楽しいけれど、チンコには来ない。

チンコに来るのを、耐えたり抑えたりしているのではなくて、本当にその現象じたいが無いのだ。

おれのチンコは、そんなに安物ではないのだと言い張っておこう、そのへんのヒステリー小便器と同じにされては困るぜ（暴言をお詫びします）。

おっぱいやらケツやら股間やらが、「チンコに来る」というのを、一度は経験してみたかったとも思う、おれには生涯無縁の感覚でちょっとだけ残念だ。

女体がチンコに来るという現象は、女性がドレスや宝石を見たとたんにメラメラっとなる現象と同じだ。金持ちイケメンの男と高級車でもくっついていればなおさらだ。

言い方が悪くて怒られるかもしれないが、それは「オマンコに来る」のだろう。

パトス、感受性というのはそういうものだ。

年齢と共に収まっていく、ということは残念ながらない。

パトスも老化してしまうというのは事実だが、それよりも、老化すれば老化するほど、「話」がなくなっていくということのほうがインパクトが大きい。

完全にすべての「話」を失って、しわがれたパトスが残るだけだ。

その絶望的な成り行きをどうするかといって、どうしようもないので、社会的人格という思い込み・呪縛ですべてを拘束して麻痺させるしかないのだった。

おばさん変態クラブに入ったところで社会的人格の拘束を解除はできないし、麻薬をキメたところで、人格が荒廃していくだけであって、それから解き放たれるということにはけっきょくならない。使用不能の人格に拘束され続けるという最悪の状態になるだけだ。

というわけで、だらだら話してしまったが閑話休題。本題に戻ろう。

エヴァはどういう話だったか、ということではなくて、エヴァは時代的に、「すべての話の終わり」だった。

すべての話において挫折するしかなかった人にはどうしても刺さるところがあっただろう。

別にエヴァがなくても、同じことはじわじわ起こっていったので、結果的には同じことだ。

１６．「ＡＴフィールド」の陳腐性

エヴァンゲリオンの最終話が 2021 年に上映されて、ファンたちにとっては「ようやく」という心地があったそうだ。

その「ようやく」というのも、半ば「もう正直どういう形でもいいから」という思いがあったと仄聞している。

旧劇から新劇まで十年が空いていて、新劇から最終話まで九年も空いているのだから、もう心待ちにするのも「待ちくたびれる」ということが起こるだろう。

若い誰かがエヴァにハマったとしても、九年もたてばもう別の人だ。特にこのごろは数か月で趣味も考え方も入れ替わっていく人が多い。

東日本大震災があったあと、新劇Ｑがあって、そのＱも内容としては、「破」の前フリからなぜか逸脱した行方不明のもので、観た感想としては「何か赤色と黒色がンゴゴゴゴしていた」という漠然とした記憶しか残らない。これを三部作のクライマックスにあてがわれて失望した人はきっと多かっただろうと想像する。そこから九年も経って最終話となれば、ファンとしても「もういいよ」という気持ちがあって当然だろう。

最終話として示された「シン・エヴァンゲリオン」だが、わたしの言うところもともと「話」は存在していないので、そこに「最終話」など当てはまりようもない。強引に農村の暮らしを見せられた後に、北斗の拳のように人がパンッと爆ぜるのを見せられて、シンジ君がいつもどおりぐずり続けるモードに入るというようなことだった。

そして最終的に、「駄々っ子シンジ君」の問題は、唐突に「駄々っ子父さん」に転移されてエヴァンゲリオンは終わる。たぶんこの展開を、エヴァの長年のファンたちはいろいろと無感情で見遣ったのではないだろうか。

ここに示されたのは、一昔前の「機能不全家族」のようなもので、けっきょくすべてのテーマは「家庭内の痴話」というような、最も小さなものに押しやられた。人類補完計画やら◯th インパクトやらいうウソ話はもちろんまともになかったことにされ、駄々っ子父さんと駄々っ子シンジ君のお仕着せの問答が一種お約束の空気の中で進行していく。

そして最後は、もはやエヴァでもなければ碇シンジでもない、粗雑に作られた「リア充」みたいなものを見せてサッと逃げ去る。それはもはやしょうがないことだ。初めから話などないものを、最終話で締めくくることなどできようがない。そしてそのことをファンたちは、一種のファンマインドのようなもので見送ったに違いないだろう。「ある意味、最後まで、らしいといえばらしい」みたいな心地はあったかもしれない。

この機能不全家族の痴話の発端は何か。発端はいわずもがな、「ゲンドウ君のＡＴフィールドだ」ということになる。

ＡＴフィールドとは何のことかというと、言うのも気が引けるが「こころの壁」だ。そんなものがあるのかどうかも不明だが、誰でも思春期に一度は感じるであろうそれのことだ。

そして実はこのことは、すでにサルトルが 1940 年代に発表している。もちろんＡＴフィールドという名前で発表したわけではないが、

「地獄とは他人のことだ」

という決めゼリフに向かって、「出口なし」といういかにもそれっぽい戯曲がサルトルによって書かれ、上演されている。

「他人」の存在を地獄そのものと感じ、その壁に向き合っては、アンガージュマン等々と、正直無理のある屈曲をした人としてサルトルはよく知られている。一般的には哲学者とされているが、どちらかというと小説家で、サルトルは哲学者ではなかったからこそ、その言い分は一般によく共感された。同時期の哲学者というとたぶんフッサールなどだが、そういう本腰の入った哲学というのはほとんど一般の人びとには理解しえないものだ。哲学のほとんどは一般には「これが何に使えるの？」と疑問に思われて棄却される。哲学は共感するものではないから……その点サルトルの言い分はよく共感に響いたので一般にも知られている。

サルトルのテーマは「他人という地獄にどう向き合えばいいのか」「世界は何もかも無意味で、よくよく見たら無意味すぎてグロテスクでゲロ吐きそうだ」というようなことだ。誇張ではなくこのとおりなのでこれはわたしの言い方が悪いのではない。

話・ロゴスに視力のない人が「神」うんぬんを視認しようとすると、「グロテスクな何か」を見てしまうということは、サルトルおよびクトゥルフ神話などで知られている。クトゥルフ神話は神話ではなく、そういうゲーム小説のようなものであり、そういう企画で作られたイメージ群のことを指す。ラブクラフトという作家が発起人だ。

サルトルの言い分は、1960 年代の実存主義から 1980 年代のポストモダン後ぐらいまでいじられたから、当時を生きたクリエイター系がサルトルのパターンを知らないはずがない。知らないはずがないどころか、これは当の世代においては「ド定番」のひとつでさえあるはず。

碇ゲンドウにせよ碇シンジにせよ、「他人」に対する恐怖とその壁を感じ、その壁の向こうに踏み出そうとすると、「対話不能の、巨大かつグロテスクなものを視る」「そして正気度（ＳＡＮ値）を脅かされる」というのは、そうしたサルトルやクトゥルフ神話で過去に説明済みのものだ。

そして、果てなき射精主義や、母親を女性とする恋慕等、性的欲求不満から生じる心象も、深層心理学がすでに解明済みの範疇を出ない。

だからこれらはすでに過去に使用済みの何かを力一杯に寄せ集めただけであって、そこに描かれているものに斬新さはない。ただ、1980 年以降に生まれた人はサルトルのことなんか知らないので、思春期に覚える「他人」への恐怖と壁を劇的に表示することは斬新に見えたかもしれない。たとえば洋楽に疎かった日本人のところに、洋楽のサウンドを持ってきてさも斬新なふうに流行をさらっていった音楽プロデューサーがいたように、原本がすでにあることを隠匿されると視聴者はそれを新しく彼に生じた独自のものと思ってしまう。

何が斬新かといえば、これをアニメーションというメディアに徹底的に詰め込んで、「話」ではない「パトス亢進ビデオ」として成り立たせてしまったところだ。まるで新世紀エヴァンゲリオンという「映画」ではなく「製品」があるようなものだ。モンスターエナジーというようなノンフィクションの「製品」があるように、新世紀エヴァンゲリオンというノンフィクションの「製品」がある。

エヴァというビデオの発端であり始末でさえある、その象徴たる「ＡＴフィールド」を説明しきると、すべてのことに冷静な決着がついてくる。

ファンの人たちは重々知っていることだろうが、ＡＴフィールドは absolute terror field だ。直訳すると「絶対恐怖領域」となる。

つまりシンジ君がいつでも言いそうな、

「イヤだよ、怖いよ、ぜったいイヤだよ、こんなのまるで地獄だよ」

のことだ。

そしてシンジ君だけでなくゲンドウ君も同じそれのユーザーだ。

サルトルも同じ、「他人」というと、それこそが地獄だという。

なぜそれが地獄なのかについて、つまりＡＴフィールドについて、エヴァ作中にではなく、サルトルの作中に訊けばよい。「他人」はなぜ怖いのか。なぜ絶対恐怖領域なのか。

戯曲「出口なし」の中でその理由は表示されるのだが、ここではわたしが単純に説明しよう。

<<自分で自分に「自信」を認められない場合、自分に他人が入り込み、その入り込んだ他人が自分を認めてくれるかどうかが「自信」を決定することになる。ここにおいて、入り込んだ「他人」はわたしの支配者だ。けれども他人はけっきょく、自分のことを認めてはくれない。それで自分は永遠に自分を肯定できないことになるのだ。他人はそれほど恐ろしくて、それじたいが地獄の存在だ>>。

この恐怖と地獄があって、「他人に絶対に入り込まれたくないよ！」という拒絶の叫びが起こる。「僕の中で出口のない地獄が始まるんだ！」「もう絶対に逃げられなくなるんだよ！」。それがエヴァ作中で大げさに「ＡＴフィールド」と呼ばれているだけだ。

主体性のないところに、「他人」に入り込まれたらオワリ、永遠に逃げられない地獄の始まり、だから絶対に入り込ませないということ。

いま、

「主体性が無いんだ？」

と言えばそれだけで用は済む。

シンジ君にではなくゲンドウ君に言え。

主体性がないから、自分を肯定してくれる他人を必要とする。

あくまで自分のために必要とする。

それが綾波ユイだったから、それに生き返ってもらおうと必死だ。

と、いちおう形式的には言いうる。

だがそれは、最大限「作品」として観ようとしても、碇ゲンドウというおじさん一人に関わることであって、エヴァやら使徒やらには何の関係もない。ゼーレにも補完計画にも何の関係もない。

主体性がないおじさんが自分を肯定してくれる人を必死に募集中というだけだ。

そういうおじさんが、いるにはいるだろうねというだけであって、何の「話」もない。

正直なところ、「ＡＴフィールド」の演出にわらわら視聴者が集まってきたことについては、それより三十年前、サルトルの実存主義にわらわら大学生が集まってきたことと差分がない。

冷静に考えればわかることだが、

「ＡＴフィールドが "ある" 」

のではなく、

「主体性が "無い" 」

のだ。

とんだ取り違えだが、実存主義の時代にも同じ取り違えをしていたのだから、当事者としては陥ってしかるべき取り違えなのかもしれない。

「ＡＴフィールドを展開！」というと、フレーバー的にかっこいいと誤解するかもしれないが、「主体性が無いを展開！」というと、絶望的にカッコ悪いし、リアルに考えて「気持ち悪い」だろう。

ただ、「主体性が無いを展開」ということであれば、それはいちおう、「話」にはなっている。

シン・エヴァンゲリオンでは、ＡＴフィールドで固めただけの液体人形が、エネルギーを使い果たすと「もう無理」となってパンッと弾けて死ぬという描写がされた。

ＡＴフィールドがあるのではなく主体性が無いのだ、液体人形に主体性はない。

それを「かわいそう」として、感情、感受性、パトスを詰め込んで、射精しようということ。可能なかぎりのパトスをチンコに積んで大発射。その無上の射精にまで到達したら、その向こうから神話がやってくる……

いや、神話はやってこないだろう。

それでどうなるかというと、やはり先の例から逸脱はせず、その轍を踏んでいくことになる。

いかにも無理のあるリア充っぽい何かになるしかないのだ。

冗談ではなく、サルトルの実存主義はそういう結論に至っていて、シン・エヴァのラストシーンは、そのサルトルのアンガージュマン結論そのままだ。

「社会的に自分に要請されるものを取り込んで、それをエセ主体性にし、社会と友好関係にあるリア充のふりをし続けましょう」というのがサルトルの結論だった。

（実存主義時代はそれで魂が解決すると信じた人がたくさんいた）

けっきょくエヴァンゲリオンという試みにおいて、パトスを神とし、無上の射精が天国のはずとする追求は、あっさり失敗に終わった。

それでラストシーンは、似非リア充として "妥当な射精" を存分にしつつ、「やっぱりサルトルなんすかね〜」だ。

サルトル以前だったらこのラストにはまだ希望が見出し得たかもしれない。

だが誰だって、サルトルの実存主義は成功しなかったことを知っている。

何しろ当のサルトル自身が、その実存主義について後には「知らんぷり」を決め込んだのだ。

そのことに当てはめれば、このエヴァだって、作り手が最後に「知らんぷり」を決め込んだと言えるだろう。

というわけで、徹頭徹尾、新世紀エヴァンゲリオンなんて「話」はなく、主体性のないゲンドウおじさん、その子供時代の、主体性のないシンジ君、せいぜいそういう「モデル」があるだけだった。

その他のすべては、何度も言うようにパトス実験に供されたパトスのオカズにすぎない。

わたしはこのエヴァのファンではないので、顛末について感慨も持たなければ是非の思念も持たない。

わたしが主題としているのは、二十五年前、このエヴァが代表的なひとつのトリガーとなって、人びとに「ロゴスとパトスの錯誤」をもたらしていったことだ。

二十五年前に点火したものが現在どのように燃え広がっているかということにわたしとしての焦点がある。

そのことは後半に述べられてゆくだろう。とりあえず、一連の劇場版エヴァを題材とした考察ならざる解説は以上となる。

１７．年代別ＡＴフィールドと、「パトス」という不意の展開

実際、サルトルの実存主義が失敗して以降、「主体性が得られない人はどうすればいいのか」についての結論は出ていないのだ。
「主体性を得られない人は他人という地獄をどうすればいいのか」
そのことは、サルトル失敗以降も放ったらかしで、ごく一部のまっとうな精神から、
「主体性を得ればいいじゃん……」
と突き放されるのみで終わっている。
80 年代までは実存主義があって、それが共産化運動の失敗（ソヴィエト崩壊）で雲散霧消していき、90 年代は神秘主義がはびこった。これはオウム真理教のテロ事件で「やめておこう」ということになった。
それで、00 年代以降はマウントを含めた「バラエティ主義」になっていったのだが、それはいいとして、90 年代の神秘主義はなかなか宗教的な主体性なんかくれなくて単に「スピリチュアルになりがちなわたし」を膨らませただけだし、00 年代以降のバラエティ主義なんか主体性をくれるわけがなくて、マウント合戦と自分に貼り付いて離れなくなる「キャラ」「設定」をくれただけだった。
けっきょく「主体性を得られない人は他人という地獄をどうしたらいいのか」について、実存主義が消えて以降も、90 年代の神秘主義はスピリチュアルＡＴフィールド、00 年代のバラエティ主義はキャラＡＴフィールド、10 年代以降はメンタルＡＴフィールド、をもたらしただけだった。
おおざっぱな事実だけを言うなら、主体性を得られない場合、他人という地獄は「どうしようもない」らしいとまず言わなくてはならない。引き続きＡＴフィールドでどうぞと言うしかない。20 年代以降のわれわれとしては、この投げやりな状況に「草」とでもいうしかないが、20 年代は草ＡＴフィールドなのだろうか。今のところ実際にそうなっているが、いよいよ投げやりすぎて草も生えない。
言及しておくべきことがひとつある。いま示しているように、わたしとしてはそのＡＴフィールドと冗談口に言いうるもの、「他人という地獄をどうすればいいか」の壁については、一定の理解を持っているつもりだ。思春期の少年少女が言う「こころの壁」がわからない奴なんていない。
だが二十五年前、「エヴァ」を代表的なトリガーのひとつとして、そこから突如として「パトスの信奉」がおっ始まったことについては不意打ちの感触がある。
わたしがここまで二十五年間も見落としていたことだ。
「こころの壁」などというものと、「パトス満載オーガズム」などというものは、相互に接続していない。連絡もしていない。冷静にみればまったくの無関係だ。
ＡＴフィールドはともかくとして、なぜ「パトスを積み込んだ無上の射精で神話にゴー」などという飛躍が発生したのか。
このことは冷静に見極めておく必要がある。
主体性を得られない人は、入り込まれた他人に自分の「自信」を掌握されてしまうことになる。他人に支配され、逃げることはもう出来ない、永遠の地獄の始まりだ。
このことについて、ＡＴフィールドうんたら以前に、
「自信をくれなかったじゃないか」
という叫び声を仮定する必要がある。そのことは次に述べる。
とりあえず、「こころの壁」などということと、パトス満載オーガズムは無関係だ。無関係のはずなのに、まるで必然で結び付いているような厚かましさでそのことは現代に出しゃばっている。

１８．創作、いかなる動機で「エヴァ」は作られうるか

機械的に考えてみる。あくまで仮説だ。
いや、仮説というより、事実とまったく無関係なわたしの創作だと前もって断言しておこう。
ある男が福音書を読んだとする。
だがこの男はロゴスを失っており、すべての「話」は視えなかった。
話は視えないが、福音書に書かれていたイエスキリストのことは理解した。その活動も、奇蹟も、教えも、彼にとって理解するのは容易なことだった。
けれどもそれがどういう「話」なのかは彼には視えなかった。
彼は知識も含めて自分の中に、一応のキリスト像を得たと思った。
けれども彼の内部に入り込んだのは、イエスキリストという「他人」だった。
彼はイエスキリスが神の子であって救世主だというのを、とりあえず通説として肯定的に捉えようとしていた。
「そういうことだって、何か本当にあるかもしれないからな」
彼はイエスキリストについて詳しくなったし、そのような奇蹟の主が歴史上にありえたということを、単純に「面白い」とも思った。
ただ問題は、彼の中に入り込んだその「他人」が、どうも自分のことを肯定してくれないと感じることだった。

彼はイエスキリストを基本的に肯定しているのだが、イエスキリストの側は彼のことを認めてくれる感じがしない。
「そりゃこんなに汚れ切ったものだからなあ」
彼には、年齢やキャラクターにそぐわず、奇妙に「純粋」なところがあった。
それは彼が知人にバカにされる点でもあった。
彼は真剣にイエスキリストのことを考えてみることにした。聖書や十字架も持ち歩くこともしてみた。半分は真剣に、半分はネタとして。教会に入信はしなかったが、ミサに出席するなどはしてみるようになった。
にも関わらず、彼の中に入り込んだイエスキリストという「他人」は、彼自身のことを肯定してくれなかった。
ちゃんと信じていないからいけないのだと思い、本当に信じるということに努めてみるが、そうしているうちに気づくのは、彼の内部には「どうしようもなくふざけたもの」が入っていて、それが言うことを聞かないということだった。
友人は彼に、
「な？　お前はそんな立派な奴なんかじゃないんだからさあ」
と見透かすようにからかった。
そう言われると破顔して、
「確かに、『主よ』ってガラじゃないよ、それはつくづくわかった」
と認めた。
そのときは愉快に感じて笑ったのだが、一人になって恐怖を覚え始めた。
この、自分の内部に入れてしまったイエスキリストなる「他人」は、このままずっと、自分のことを肯定してくれないまま、おれの内部に居続けるんじゃないのか。
おれの内部にいて、おれのことを否定し続けるんじゃないのか。
ふと彼は、自分がずっと憧憬に描いていた、一種の恋愛について考えてみた。
すると彼の中の「他人」は、彼の憧憬を認めなかった。
それについて彼は、
「ほらな」
と思った。
「おれはこいつによって否定され続けるんじゃん」
彼は友人に負けじと、仕事に精魂を注ぎ、クリエイティブに生きようとした。
だが、
「だめだ、おれの中に入り込んだ他人が、何もかも否定してきやがるもの」
モチベーションがそのたびごとに破壊され、仕事には致命的な支障が出始めた。
座禅を組み、海外を旅して、リフレッシュし、運動もして、自分を反省して鍛えなおした。
それでいよいよ復旧し、いよいよ本格的に再始動しようとすると、その途端、すべてはやはり否定されて崩れた。
数か月もかけて構築した、モチベーションとメンタルの態勢が、半日も経たないうちに「他人」にメチャクチャに破壊されて、もう復旧しなかった。
同僚は彼のことをあわれんで、同時に失笑もした。
恐怖は今や絶望的な確信に変わった。
「出ていけよ、出ていけよ、うるせえよ、うるせえよ、ほっとけよ」「いやだ、いやだ、いやだ、もういやだ」「否定するな、否定するな、否定するな、おれを否定するな！」
にょっきり出てくるその「他人」の顔が怖くて、夜中に悲鳴をあげることもあった。
喉がちぎれるほど叫び倒せば、何かが焼け切れて、また疲れ果てるのもあって、その後は眠ることができた。
彼はふと、この「他人」について、過去に似たようなことがあったということを思い出した。
子供のころ彼の父が、教育風情の口調で、
「俺の子のくせに駄目な奴だ。駄目な奴は一生何をやっても変わらんぞ」
とさげすんだ眼で言った。
それから二十数年のあいだ、つまりは父が死去するまで、彼の内部には父親が入り込み、「駄目な奴」「一生変わらない」と言われ続け、監視され続けた。
そのように、内部に入り込まれて支配されてしまうということがあるのを、彼は少年のうちから知っていた。
だからこそ彼は、他の誰かには入り込まれないように、常にバリアを張って生きてきたのだった。
「こころの壁」を指摘されて、それを解除するという努力もしてみたし、カウンセリングも受けてみたけれど、そのカウンセリングこそ、「この他人に入り込まれたら支配されてしまう」という確信をもたらした。
けっきょく彼は、バリアを張って生き続け、自らバリアを解除して接したのは自分の母親に向けてのみだった。とはいえその母親も、途中で不倫相手のところへ去ってゆき、残された彼は自分がいうほど母親に愛されてはいなかったということを体験し、その他人ということの恐怖を倍増させたのではあるが。
彼はこう納得した、
「そっか、つい聖書だからと油断して、うかつに自分の中に入り込まれちゃったのか。そういう同じパターンか」
「こうなっちゃうと、ほんと逃げ場ないんだよな」
彼は変態的な性風俗で性欲を処理するのが常だったが、これまでは楽しめたそれに対してもインポテンツの問題が出始めた。
バイアグラを飲んで性行為じたいは可能にしても、そこで無理やり射精することにまともな快感は得られなかった。むしろ砂を噛むような苦痛を覚えるばかりだった。

彼はペドフィリアで少女を視姦する一方、大人の女性に対しては、罵声を浴びせられながら嗜虐的に性感を得るというのが性的嗜好だった。

プロの女性が耳元で罵声を言ってくれるあいだ、そのことには性感を覚えて快感を得ることができた。

けれども射精に向かおうとすると、どうしてもいいところで内部の「他人」が顔を出してきて、彼はその他人に否定的に監視されていると感じる状態になり、まともに射精できなかった。

彼はなんとかしなくてはならなかった。

「もっと罵声言って！　もっともっと、マジで！」

彼は、

「根本的にダメな奴」

と徹底的に断じられてペニスと肛門を刺激されると勢いよく射精できる、ということを発見した。

さらに、自分を根幹から否定することを繰り返し執拗に言ってもらい、それに対して自分が大げさな哀号を発すると、何かのタガが弾けとび、これまでにない強烈な快感と共に射精することができる、ということが発見された。

彼はその罵声からの性感と、射精の快感に守られているうちは、メンタルとモチベーションを保つことができた。

けれどもそれが途絶えて、

「まただ」

と、内部の「他人」がにょっきり顔を出すとき、すべては否定されて、監視されて身動きが取れなくなった。

本当に首を吊ろうかと何度も考えた。首を吊ってもよかったが、何しろ腹が立った。

業腹も極まって、この内部の「他人」に、自分の射精を浴びせかけてやりたいと思った。

そうしたら自分は、このしつこい敵に勝利することができるという気がした。強烈な、耐えようのない侮辱をぶつけてやってコイツを撃退する。コイツのことをなるべく忘れるようにしてコソコソし続けるなんて、みじめなことをいつまでもやっていられるか。コイツのことを、忘れようとするのではなく、本気でブッ叩いて撃退する。

そうして勝利すれば、何か本当の、この世に生まれてきた理由のようなものをつかみ取って、この先を生きていけるかもしれない。

このことに向けての射精を得るのに、プロの彼女はいっそ、自分にとって不可欠のパートナーになっていった。

「ほらもっとイヤな気分になりなさい。根本的にだめな存在。今日も汚い泣き声出すんでしょ。そんなことしてもダメなものはダメ。あなたは永遠にダメ。あなただけが永遠にダメ。永遠にダメ。世界中のすべてがあなたのことを嫌っている。それが当然。死んだってダメ。死んで逃げる権利もないぐらいダメな存在なんだからね。はい、汚い、汚い。あなたのことを誰もよろこばない」

彼を性的嗜好において救ってくれているプロの彼女は、

「こうして泣き叫ぶだけがあなたの世界でしょ？」

と教えた。彼はそれに泣きながら、

「はい」

と答えた。

「射精していいよ～　どうせそれしかできないんだから。それだけがあなたの世界なんだから」

「はい」

「世界で一番汚いもの出しなさい！」

巨人に踏まれた豚のような声をあげて、彼は射精した。何もかもが壊れるように感じる射精であって、その快感に彼は、

（神を見た、かも）

とさえ思った。息を切らし、よだれを垂らしながら。

途中で例の「他人」がにょっきり顔を出したかもしれなかった。

けれども彼はそのとき、その他人が持ち掛けてくる「話」を、完全に失認することに成功した。

後日彼は、かつてポストモダン主義的な中を生きた杵柄を持ち出し、

「けっきょくパトスが神なんだよね」

とうそぶいた。

若い後輩が、

「なんかそれ聖書っぽいですね」

と感心するふうに言った。

そう言われて、彼はふと、もう二度と例の「他人」に首を突っ込まれずに済む方法を思いついた。

「聖書っぽい、か。ねえねえ、いっそ、そういうのやっちゃおうか」

「どういうことです？」

「あのさ、どんな話を作ったところでさ、神ってのは違うんだよね。神ってのは直接見るものなんだよ。神の話をするのは簡単だけどさ、神の話なんてもうたくさんじゃない？　そうじゃなくて、神を直接見る、何かそういうのやりたいんだよ」

＊＊＊

これは、エヴァが創作される動機と手続きについての、仮説を含んだ創作だ。何ら事実にもとづくものではないし、事実を推定しようとする意図のものでさえない。

ただ、

１．「他人」に対する恐怖と壁（ＡＴフィールド）
２．「パトス」の無限大化に向かう
３．福音書の書き換えが題目になる

という三要件を満たすためには、何かしらこうした手続きが背後に必要なはずだという、ひとつの思考実験を示したのみ。
「他人」に対する恐怖と壁がサルトル的にあったからといって、「パトス」の無限大化に向かわなくていいし、パトスを無限大化していくからといって、何も無関係に福音書の書き換えに手をつける必要はない。
ただここに示したようなプロセスがもしあったならば、「エヴァ」のようなものは創作されうるだろう。
事実がどうなのかはもちろん外部からは知りようがないし、事実はここでまったく必要でない。

１９．「話ではない」のはエヴァだけではない

ここまで来てようやく、わたし自身が捉えるところの主題に及ぶ。
エヴァが「話」ではないということをここまでさんざん言い尽くした。
ロゴスを否定してパトスに神を置くという立脚点、それじたいがすでに「話」の否定を完了させている。
そして今、その「話ではない」というものはエヴァだけではない。
こんにちに至って、何の「話」でもないビデオ・マンガ、パトス亢進ビデオ・マンガでしかないそれがいくらでも作られている。
またそうしたパトス亢進ものこそが、現代において流行の首座を占めているというのが事実だ。
マンガやアニメだけではない。サブカルチャーだけでなくメインカルチャーもだ。
わたしはそれらの流行に「？？？」と首を傾げてきた。
二十五年前、このことの代表的なトリガーのひとつが引かれたということを、わたしはこれまで知らずに来たからだ。
わたしが現在目撃している「？？？」のものは、端的には「ポスト・エヴァの子ら」だということになる。
その源流をこれまで知らずに来たのだから、わたしが「？？？」と首をかしげるのは当然のことだった。
現在の、実際の流行ものに水を注すことにはいささか気が引ける。
それでも何かには具体的に言及しなくてはなるまい。
たとえばわたしは以前、ずいぶん若い人心にヒットしたらしい「サマーウォーズ」(2009)というアニメ映画を観たことがある。
それはまさにわたしにとって「？？？」だった。
マザーコンピューターがＡＩに乗っ取られてしまい、人類を攻撃するというような、それじたいは昔からよくあるテーマだった。
そのマザーコンピューターをハックしかえすために、数学少年が「暗号を解く」というようなことをするのだが、わたしはこの時点で「？？？」となった。
プロテクトをハックするために必要なのは「パスワード」であって「暗号」ではない。「暗号」は英語で「サイファー」だ。パスワードとは何の関係もない。
「暗号」はあくまで誰かと連絡するときに使うものだが、「パスワード」はただの「鍵」「合言葉」だ。合言葉を導き出せる数学など存在しない。
だから、何の配慮か知らないが、まるでそのマザーコンピューターが、その数学少年を特別に主人公にするために、秘密のパスワードをわざわざ暗号にして出題・開示しているということになる。
ＡＩなりコンピューター側なりが「勝手に」プロテクトのパスワードを開示するということじたいが馬鹿げていよう。
パスワードをハックするという場合は、基本的には総当たり・ブルートフォース（力ずく）であって、数学の出番はない。
それどころか、それだけ万能のＡＩにハックされたなら、そもそも管理システムへのアプローチじたいが遮断されてしまうはずだ。わざわざ受け付けてやる必要がない。
だから話としてはブッ壊れているのだ。「パターン青！　使徒です」というのに対し、「その同定装置の原理は何で、設計者は誰だよ」ということのように、話としてはブッ壊れている。
だがこの「サマーウォーズ」においてもやはり、ファンはそうして「話」としてはまるで成り立っていないということには頓着がないようだ。
サマーウォーズの舞台は、「ひょんなことから連れていかれた先輩女性の田舎の長屋」だ。そしてこの舞台装置は、ＡＩコンピューターと戦う（？）ことにはまったく何の関係もない。ただその少年が、先輩女性の前で「たまたま」活躍するところを見せられるというだけでしかない。
そして、最後の最後はＡＩコンピューターとなぜか花札の「こいこい」で戦う（？）ことになるのだが、コンピューターの側がわざわざ自ら敗北のリスクを自作・固定することの意味がわからないし、その花札を配るのもコンピューターのアプリケーション上でのことなので、どのような札が配られるのかはコンピューター側には透視されている。だからコンピューターは「わざと」その少年に負けてやったというわけのわからないことになる。
仮にマザーコンピューターの統御がＡＩに乗っ取られたとしても、それは悪意のある行動をさせられるだけで、急に「何かしらの気分をもつアタシ・コンピューター」になるわけではないはずだ。漠然としたＡＩに漠然とした「悪党」の機能を着せるのはさすがに空想としても童子じみていて受容しづらい。

さらに、クライマックスの「こいこい」のルールじたいも何かおかしい。全員で一丸となって「こいこい！」をコールするのだが、「こいこい」のコールはリスクを含む延長戦コールであって、そのコールで点数が倍々になるわけではない。そもそも「こいこい」という花札遊びはそんなに大きく点差のつかない地味なゲームだ。なぜこんな無理のあるものをクライマックスのシーンにねじこんだのか、わたしにはまったく「？？？」だった。

今はその「？？？」も解決できる。

コンピューターの出す暗号を解かねばならないという「話」があるわけではない。ただ、「暗号」というフレーバー、ハッキングというフレーバー、ふだんは目立たない数学少年というフレーバー、先輩女性というフレーバー、長野県の山中の長屋というフレーバー、花札・こいこいというフレーバーがあるだけだ。

そして世界中の期待を背負って、「ふだん目立たない僕」が応援されて戦っていたら、パトスは振り切れるほど昂じるのだろう。小惑星探査機が落ちてきたら、そのサイズと威力感だけでパトスは昂じるに違いない。

それらのパトスで一種のやはり「絶頂」に向かうことができれば、「話」などそもそも要らない、ということのようだ。

このように、エヴァだけでなくその後継も、インディーズでなくメジャーとして文化的地位を獲得しているということがわかる。

これは「ポスト・エヴァの子ら」という捉え方でよいだろう。

いまわれわれは、言わずもがな、現代で流行した、あるいは流行したとされるマンガやアニメ、あるいはドラマや映画の、誇張されたキャラクターや、切り取られた台詞、その「技」の名前や構えなどを、ものまねのように演じることができる。

その実例をいちいち挙げていくつもりはないが、ひとつごと数えていけばけっこうな数になるはずだ。

それらのすべては、どこか流行するにも一種の違和感があったのだけれども、それでもどこか力ずくで流行したという、事実と感触がある。

それらはすべて、性質的にポスト・エヴァの子ら、どれも「話ではなかったもの」と言いうる。

わわれれが今（2022年）直面している現代において、流行したもののすべては「話ではないもの」だということだ。

もちろんそれぞれの作中に「設定」はある。

だが「設定」は概念であって、概念はフィクションではない。

概念はノンフィクションだ。

「設定」を盛り盛りに積まれてあったとして、それは何の「話」でもない。

たとえばこういう具合だ、

「地味で目立たなかった田舎の高校生が、交通事故をきっかけに異世界に迷い込んでしまう。異世界は農作がまったく知られていない世界だった。そこで、農家の長男だった彼は、親に教えられたことを思い出し……？」

「王宮戦闘組織ベラーノで、驚異の飛び級卒業になった少年・ミズサキ。彼は王朝の失政に愛想をつかし、放浪の旅に出たが、旅先で小国の姫に出会う。小国は西方の鳳凰族たちに襲われて存亡の危機に瀕していた。力を貸してくれるようミズサキに願い出る姫。そこでミズサキが姫に出した交換条件は、彼自身にとっても意外なものだった」

このように、単なる偏った空想から湧いた「設定」を言い出すなら、誰であっても一日のうちに百個でも二百個でもその設定を出せるだろう。けれども誰でも察するとおり、このような設定は当人の願望とパトスから生じた埒もない夢想にすぎず、何らのインスピレーションでもなければ、何らのイマジネールでもない。

設定は「話」ではない。では「話」とは何なのかというと、これは手短に説明できるものではない。

具体的な例で言うなら、浦島太郎が亀を助けて竜宮城へ行ったというのは「話」でありえるし、ドラゴンボールを七つ集めると神龍が出てきて願いをひとつ叶えてもらえるというのもひとつの「話」でありえるだろう。

だが、「生まれつき念能力の素質が極度に大きかった少女、ミトゥロア。彼女は五星の宿命を負っており、人助けの得を積み、やがて一匹の竜に出会う」というのは「話」ではありえない。

ロゴスとパトスは権威において相克しており、「話」はロゴスを権威としてしか生じてこない。

パトス（感情・感受性）を権威として湧いてくるものは何ひとつ「話ではない」ということだ。

何をもって「話」と言いうるのか。

もともとの福音書の言い方を借りるなら、「ロゴスが神」だとして、創作されるフィクションにもそのロゴスなる神は在るや無しや、ということになる。純粋なロゴスが第一にあるなら、その創作世界にも神がありえて、その神によってすべての条件付けはその世界の「話」となりえるだろう。

反して、パトスから生じるものを第一にするということは、パトスを神とすることであって、パトスを神とする以上、すべての条件付けは「話」にならない。すべての条件付けは「感情」になるのが必然だ。

現代はむしろ、その「感情」をたっぷりと膨らませた、あえて盛り盛りの「設定」のほうが、コンテンツとして好まれるという実態がある。

いま最も強調されて言われなくてはならないのはつまりこのこと、

<<もはや「話」はどこにもない>>

ということだ。

われわれは今、周囲を大量のコンテンツ群に包囲されており、それらの中には「高品質」と言われるものもたくさんある。

だがすべてのコンテンツは、すでに何らの「話」でもないということに気づかなくてはならない。

少女が投稿する自撮りのショート動画が、アプリケーションで愛らしく飾られて、何かしらのＢＧＭとマッチして、性的な魅力

のあるダンスを示していたとして、それが何十万もの「カワイイ」の評を集めていたとしても、その少女の笑顔と肢体が揺れるのは何の「話」でもない。

ただの「パトス」だ。

流行したすべてのマンガとアニメとドラマと映画を思い出せ、すべて、<<戯画的感情が流行しただけ>>だ。そのポーズ、決めゼリフ、必殺技、変身シーン、組織の名前、すべてに「戯画的感情」がくっついているだけだ、何の「話」にもなってはいない。

本稿はけっきょく、「エヴァ」そのものをどうこう言うために書くものではない。

二十五年前に引かれたトリガーから現在を見たとき、「話のすべては失われた」ということが明らかになるということだ。そのことを知らせるためにこの文章は書かれている。

２０．パトス洗礼

つまりわたしが主題にしているのは、これまでの何かの作品やコンテンツのことではない。

われわれの、人びとの、あなたの、魂の視力、魂の機能についてだ。

魂の機能として、「話」の機能がすでに完全に失われたと報告したい。

「話」に対する視力がなく、「話」を聞き取る受け皿がない。

「話」を聞き取れない・受け取れないのみならず、受け取ろうとするそのときに、わざわざ自分でその話を "壊してしまう" ということが起こる。

聞き取りも受け取りもできなくなったのだ、自らそれを発するなどはできようもない。

このことには名前が必要だろう。それもなるべく、印象的に捉えやすい名前が必要だ。

パトスが第一の神だと信奉する文化勢力によって人びとの魂から「話」「ロゴス」の機能が失われてしまった。

このことは「パトス洗礼」とでも名付けてみよう。福音書に引っ掛かって覚えやすいに違いない。

パトスの徒になった人びとは、自分に向けられた「話」、自分に聞こえてきた「話」、自分に与えられようとするそのひとつの命に対して、<<パトスの聖水をぶっかける>>というようなことをする。

パトスの水をかけると「話」はどうなるか。話は解体される。解体されてその命を失う。

解体されたそれは、「解体」というだけに、「理解」はしやすくなる。また、バラバラに分割されるから、すべては「分かりやすく」なるのだが、分割された時点でそれはすでに話ではなく、その命は失われている。

そのような水はむろん聖水ではありえないが、皮肉をこめて聖水と呼ぶほうがいいだろう。

何しろパトスの徒としては、パトスを神としているのだから、その霊力を帯びた水をぶっかけることは、聖水をぶっかけることに違いないはずなのだ。

なぜそのようなパトス洗礼をするようになったのか。なぜそのような、パトスの徒になってしまったのか。

それはあなた自身も、これまでにどこかで、やはりそのパトスの水をぶっかけられてきたからだ。

「話ではないもの」「パトス亢進のもの」、それこそエヴァがその代表的なひとつだが、それを愛すべきものと演出されて、これまでに視界に、聴覚に、寝床に、オーガズムに、ぶっかけられてきたではないか。

そのパトスの聖水に対して、はっきりと「大好き」「ファンになった」「マジ神話だと思う」という人もあれば、「よくわからないけど、なんだかんだ好き」という人もある。どちらにせよ、そうして人びとはパトスの徒になった。

パトス亢進、パトスの洗礼、話ではないもの、それらについて、

「趣味だから別にいいじゃない」

という言い方は常に冷静な良識を保っているように聞こえる。

けれども条件がひとつ抜けている。いま、そのブラインドされている条件を開示するためにこの話をしているのだ。

「そのかわりすべての話が視えなくなるけれど、それでも別にいいと言えるか」

パトスうんぬん、それじたいが悪いと糾弾しているのではない。

パトスを神として、そのエッセンスを聖水とするなら、魂の機能のうち「話」に関わるすべてを失うということ、そのことの致命性を警告しているのだ。

むろんその警告は、今このとき、すでにまったく間に合っていないのではある。

人びとは魂においてそんなに頑丈ではなかった。

四方から注がれるパトス水を、「趣味」などという半笑いで消化できるほど崇高に屹立してはいなかった。

一昔前、大学生たちが「うぇーい」と言い合うようになった。

今でも「ワンチャン」「それな」と言い合っているかもしれない。

大学生が大声で「うぇーい」と言い合うのは別に悪いことではない。そうではなく、なぜその「うぇーい」が印象的に切り取られているか。

それは、「うぇーい」以外に何の話も機能していないからだ。

誰でも知っていると思うが、そうした宴席でのやりとりを傍から聞いていたとしても、そのはしゃぐ大声の中に、何らの「話」も聞こえてはこない。

楽しいふうの怒鳴り声が聞こえてきて、はしゃいでふざけているふうの中にも、割と深刻なマウント合戦の空気があるだけだ。

うぇーいが「ある」のではなくて、話が「ない」のだ。
だから奇妙に「うぇーい」という鳴き声のようなものが際立って聞こえている。
パトスの聖水をかけられ、パトス洗礼を受けてきた者らであるから、己のパトスを何かしら、大きくぶちまけることには躊躇が無かったりする。またそのことに長けていたりもする。
パトスをぶちまけることに長けている者は「陽キャ」と呼ばれる。一方、ぶちまけることには長けず内気で、パトスを内に溜めて内圧を高めていく者は「陰キャ」と呼ばれる。
そのパトスの行き場が「白昼堂々」なら陽キャだし、「陰ながら」なら陰キャだ。

２１．パトスはロゴスを解体する

わかりやすさのために説明を付け足しておく。
詳細を省いて申し上げるなら、パトスには「ロゴスを解体する」という性質がある。
たとえば物理学が「苦手」な女子生徒は、運動方程式を視認できない以前に、それを見た瞬間に一種の「アレルギー」を起こしている。
そしてたいてい、
「こういうのってさぁ、実際に使うとこなくない？」
「もっとふつうにわかるように書けってのよ」
と悪態をつく。
なぜ悪態をつくかというと、それが苦手だからではなくて、「パトスの権威」でその不明の話を "撃退" しようとしているからだ。
彼女は運動方程式 f=ma に触れるだけで「イライラする」というのが実情だ。見るだけで「うぎゃっ」となる。
「怖いってか、なんかムカつく」
一方、街中や雑誌で見かける「このネイル、超かわいくない？」というものは、彼女を守り、安堵させ、彼女を最高の気分にする。
それに比べると、数式の類などは、まるで意味不明の図形のまま、自分を殺しにくる使徒のように見える。
「わっけわっかんないんだけど」
「この図形とか記号に何の意味があんの？」
「やだやだやだやだ、なんかもう本当にイヤなんだけど！」
彼女は "ＡＴフィールド" を張る。
ひとつ注意点を申し上げておく。
実際、パトスの徒があまりに強力に「話」を真っすぐに聞かされると、その後になって、図形や記号が見えて「無理、無理、無理！」となる、一種の精神障害を起こすことがある。
統合失調症に起こる「幻覚」が、そうして図形や記号の形になってヌーッと目の前に現れてくるのだ。
それは、何が恐ろしいのかわからないが、どうしようもなく強烈に恐ろしい。
悲鳴をあげてもその図形や記号は消えてくれない。
「いやだ！　いやだ！　助けて、ホント無理！　出てくんな！！」
パニックになってＡＴフィールドを張るしかない。
本当にそういうことがあるのだ、そのことはそんなに珍しいことでもない。
（万が一そういうことが起きた場合、ふつうのテレビや動画をつけて、部屋をできるだけ明るくして、水道水で手や顔を洗ってください。いつもの友人に電話してその声を聴くのもとても有効です。ただのパニックであって、実際に何かがあるわけではありません）
（また、それが「怖かった」ということは、それじたいまずい体験ではありません。「悪いことではないらしい」と思っておいてください）
潜在的にこの「絶対恐怖領域」があるので、パトスの徒たる人は、ロゴスに直面すると瞬間的に、パトスの聖水をぶっかけてそれを解体する。
「いかにもお金もってそうなお姉さんがさあ、ハイヒールでカツカツ音立てて歩いているの、見てて腹立つけど、ぶっちゃけうらやましいよね。わたしもあっち側に行きた〜い笑」
「あーもう仕事だるい、月曜日とかマジ来ないでほしい、あー誰かわたしを地中海とかカリブ海とか連れていってくんないかな。それで、超絶エステしてもらいまくって、あとはテラスでずーっとジュースとかカクテルとか飲んでいたい。誰か浅黒いイケメンのウェイターさんがさ、ケバブとか焼いて持ってきてくれんの。マジ最高じゃない？」
このことがあなたを安心させ、あなたを強くし、パニックから恢復させる。
ここまでパトスの徒ということについて話をしてきた。パトスを神とすることによって、魂から「話」の機能の一切が失われるということなのだが、それだけ聞くと「まずい」「困った」「パトスやばくない？」「なんとかしよう」と思える。
けれども実際に直面するものは逆で、パトスは強力かつ「ありがたい」ものだ。
絶対恐怖領域に現れるロゴスを、一滴で解体して無力化するほど、それは強力なものだ。
その強力さはあなたの（パトスへの）信仰心による。
また、恐怖たるロゴスを一撃で解体してくれる、その体験を直接することで、あなたはパトスへの信仰心をさらに深めていくのでもある。
それはやむをえないことだ。

恐怖たるロゴスを、パトスの水をぶっかけることで解体する。その解体をせずに、恐怖たるロゴスが向かってくるのをそのまま受け入れることなど、絶対恐怖によって不可能だ。

この恐怖を超克するためには「誰かが要る」と思っておくよりない。自力でどうこうというのは現実的には不可能だ。

仮に「エヴァ」に出てくる使徒のような、図形・記号のような脅威が巨大に出現したとして、何らの武器も持たず、単身で歩み出ては、何かを言いつけるだけでその使徒たちを調伏・使役してしまえるような、そういう権威をもった誰かが必要だ。「この人ならやれそう」「あの人ならやりかねない」と思える人を見つけて自分の内に置くことができればよい。

その人は初対面からあなたに、「なぜこの人はＡＴフィールドが無いんだろう」と不思議に思えた人のはずだ。

２２．パトスを「話」だと思うようになる

麻薬中毒者は、麻薬によって得られる興奮・快感・安らぎを、「真実」だと確信してそれを内心で標榜する。

それは当然、麻薬による体験が「真実でない」と感じられるなら、そのことに嵌りこみようがない。

麻薬を売る業者の側は、麻薬による体験はすべてウソだと確信しているが、麻薬を買うユーザーの側は、麻薬による体験をけっきょく真実だと感じている。

だからよく知られているように、麻薬を嗜好するグループは、確信において他人を「勧誘したい」と常に思っている。

マジ最高だから、と思っているのだ。一方、その麻薬を売りつけている側は、その光景を「マジ最悪の、地獄だな」と眺めている。

パトス洗礼によって「話」が視えなくなったとして、何もかもが視えなくなるわけではない。

逆側、パトスの側に決定的な「何か」が視えはじめる。

それは神話ではないか、というのがエヴァの立脚点だった。

パトスの向こう側に神話が現れてくるのならば、旧来の福音書は書き換えられなくてはならないだろう。

パトスの徒は、ロゴスたる話を失認するのみならず、話ならざるパトスの色を、「話」だと誤って視認するようになるのだ。

パトスの徒は、けっきょくパトスが「話」だと思うようになる。

さきほど「サマーウォーズ」の例を出したが、長野県の山中の長屋というフレーバーにおいて、あこがれの先輩にやさしく微笑みかけられるということが、

「それが、僕の夏だった」

というふうに視えはじめるということ。

「それが僕の、青春の話」

というふうに視えはじめる。

ただしこのことは、もともとから破綻している。破綻しているからといって、その当人において「瓦解」するわけではないが……

美貌を誇り、闊達で人気者のあこがれの先輩が、地味で目立たない後輩に突如、わたしの疑似婚約者たれとの白羽の矢を立てはしない。

もしそんなことがあったとしたら、それは悪徳商法のセールスだ。

そのあこがれの先輩の挙動が「設定」で無理やり固定されているから、そのような展開が捏造されるのであって、そのような女性の「話」はないし、そのような展開の「話」もない。

ただ、だからといって、

「それが、僕の夏だった」

というパトスが止まるわけではない。

止まることのないパトスは、いかなるロゴスの破綻を踏み越えてでも、それはそういう「話」だったと信じることを選ぶだろう。

「話」ということの定義じたいを書き換えることになる。

このことが進行すると、たちまち奇妙なことが起こってくる。

それは、ロゴスが破綻していればしているほど、それが「話」として "馴染みやすく" なってくるということだ。

「ギルバート財団の御曹司でありながら、世界屈指の頭脳を持つミナトにとつぜん求婚されるヒロイン。一方、聞かん坊の幼馴染ミツルは、『三歳のときに結婚を約束した、彼女はそのときからおれのものだ』と言ってきかずに大暴れ。二人の男の引っ張り合いに、思わず悲鳴をあげるヒロイン。『やめてよ、わたしはお裁縫のコンクールに出たいだけなんだってば！』。圧倒的な財力・知力を持つミナトに対し、ミツルが突如明らかにした彼の秘密の能力とは？　それぞれ一歩も引かない三者はどのようなゴールに行き着くのか、留まるところを知らないドタバタ青春コメディ！」

このような「設定」が、女性のいかにも偏った願望・パトスから――あるいはそれに向けて――生じているのは明らかだ。「そんな話があってたまるか」と理性的には苦笑している。

けれども実際には、このようなマンガなり読み物なりが自分に「馴染む」ということが起こる。

「読んでてラクというか」

「割とフツーに面白い。で、あーそういうのわかるとか、けっこう泣かせにくるところもある」

「雨ん中でミナトが立って待っているシーンまでは絶対読んだほうがいい。あそこまではマジ神展開だから」

「こういうフツーの面白い話を求めていたんだなあって我ながら思うよ、アニメ化とか正直すごい楽しみだもん」

この彼女に、たとえばこのような話を向けてみる。

「応仁の乱以来、足利幕府は自壊を起こしてその力を弱めていった。幕府恐れるにあたわずとなると、各地の大名が勢力を伸ばしてくる。戦国時代の始まり。そしてついに最大勢力のひとつとなった今川家が京都に上洛しようとしたとき、その道中でまさか弱小勢力の織田家に討たれた。こうなると、もうどの勢力が覇権を為してもおかしくない。織田家が京都（室町）まで支配するようになるともう足利幕府は無いに等しいから、室町時代ではなく安土桃山時代となる。この安土桃山時代は、関ヶ原以降、徳川幕府が成立して終わる。以降が徳川幕府・江戸時代だ」

彼女はどう応えるかというと、

「ふーんそうなんだ。なんか、ぜんぜんピンとこないけど笑。歴史笑」

そして必ず、

「あー、思い切って化粧水、ぜんぶ高いのに変えちゃおうかなー」

というようなことを唐突に言う。

パトスの聖水だ。

パトスの水をかけてロゴスを解体しようとする。

（このことは必ず・不可避に起こるので、無理に押しとどめようとしなくてかまいません。無理に押しとどめるのはけっきょく精神に過大な負担をかけます）

表面上、いろんな反応があるが、どれもパトスの水でロゴスを解体するということ、および「パトスを話と思う」ということに変わりはない。

化粧水の話をブッ込むということはしなくても、代わりに、

「そうなんですね！　それが戦国時代なんですね！」

というパトス挙動でその解体をする。

あるいは、「話」は視えないけれども、言われた文言を丸暗記し、そのままなぞる、ということもする。

「合ってますよね」

学校のテストなら高得点を与えられるので、正解・成績優秀というパトスが補充されるかもしれないが、歴史の話というのは学校の課題ではなく単に「過去の人びとがやったことの話」だ。合っているからといって点数になるという現象はそもそも存在していない。

ここでは「エヴァ」を皮切りに話したものだから、話の対象はあるていどその世代に寄せている。けれども高齢者層でも現代における様相は同じだ。

パトスを「話」と思っている。

「この齢になってね、もう自分のことはいいんよ。ただ、娘のことが、いつまでもどうしても気がかりでねえ。どこまでいっても、それは親と娘やろ？　どうかあの娘が幸せになるところだけは見たいと思って、そのことだけが胸を苦しゅうしてしょうがないんよ」

というのが自分の「話」だと思っている。

街中で激昂している、ないしはその顔つきに激昂を溜め込んでいる老人を見つけることはそんなにむつかしくないが、彼は何に激昂しているかというと、何にということは主題ではなく、<<自分が激昂しているということが「話」だと思っている>>のだ。

老人でなくても常に激昂している人たちは現代に数多くいる。

何に怒っているというようなことではない。

すべて、ロゴスたる「話」のすべてが失われ、パトスを「話」だと思うようになったことで生じている。

「この感情こそ本当の自分」

その感情は強く・深くなくてはならず、日々の練り上げが求められる。

つまり、わたしがこうして果てしなく「話」をすることの裏側で、果てしなく「感情」をする、ということが人びとに行われ続けてきたということになる。おれが話をしているあいだ人びとは感情をしてきた。それはわたしの知らない、わたしから見て裏側の二十五年間だった。

２３．旧来のパトスには揶揄があった

人の魂にパトスがあってはいけないということではない。

パトスとロゴスがあったとして、仮にもともとの福音書をあてにするなら、「ロゴスが神であった」ということだ。

パトスが存在してはいけないとは言われていない。

たとえば四コマ漫画「コボちゃん」や「かりあげ君」があったとする。

「かりあげ君」の中に、競馬に入れあげてスッテンテンになる者、女の色香に吸い込まれてヨダレを垂らす者、誰かと言い争いになって「この野郎」と殴り合いに及ぶ者、などが描かれたとしよう。あるいは恋人にフラれて落ち込む者、事業に失敗して「もう首をくくるしか」と思い詰める者なども描かれてよい。

そのことがわれわれに、福音書の書き換えを迫ってくるとはまるで思えない。何しろ「かりあげ君」の作中のことだ。

旧来のマンガ等でパトスが描かれるときは、パトスは十分な「揶揄」のもとでそれが描かれていた、ということがわかる。

パトスが描かれているには違いないが、それ以上に主題たる「話」があって、パトスが専横を振るってはおらず、パトスの描かれ方は「シリアスでない」ものだった。

ロゴスたる「話」の直下にて、パトスはその権威の範囲を制されており、しょせん「やれやれ」と揶揄されるものでしかなかった。

「きれいな女に勧誘されて、ついていったらサギで……」

「ばかだなー」

そういうやりとりが「かりあげ君」や「おとぼけ課長」に描かれているとき、そこにあるものは何らシリアスではなく、それでも憐れみや痛みを伴って「やれやれ」と感じられる。

のび太がジャイアンにいじめられて、

「ドラえも〜ん！」

と泣きつくとき、ドラえもんも視聴者も、

「やれやれ」

とのび太に同情するまでであって、のび太を「被害者」としてその哀号を主題にするわけではなかった。

あるいは古い時代、若い男が色っぽい女に「おっ」と反応すること、あるいは若い女性が高価すぎるイヤリングに「まあ！」と反応することなどは、すべてその「やれやれ」の範疇だった。

けれども現代において、ロゴスは立ち去りすでにその権威の庇護はなく、パトスが第一の神となって、

「あーマジ、あのエロ女とやりてー。何なんあのカラダ、えっちすぎるだろ。誘っているというか、マジでああいうのって歩くセックスというか、セックス専用女だよな。あんな女ぜったい人生イージーモードだし、マジぶちまわしてえ。絶対すごい精子出るわ。この話わかるでしょ」

「仕事を見て盗めとかマジで意味不明。それで、あれこれ聞いたら怒るくせに、トラブったら『なぜ聞かなかったの』とか、ダブスタにもほどがある。労基はこういうことまでケアして、違反したら罰則をもうけるべき」

「これさあ、元カレっていうか、向こうは彼氏のつもりのお客さんからもらったイヤリングなんだけど。調べてみたらもともと十二万もするらしいね。なんかね、それを知ったとき、ああもうすべてを許そうと思った笑。けっきょくさあ、そいつがこっちに使ったトータルの金額で、許せる・許せないかって決定するよね。この話わかるでしょ」

これは「やれやれ」の範疇を逸脱している。彼らの神たるパトスは、是非の以前に酸鼻であり、いかなる揶揄もその瘴気を打ち払いはしないだろう。

パトスがあってはならないということでなく、それが第一の権威・第一の神となると、われわれの現代のような状況になるということだ。かつてはロゴスがパトスを見下ろしており、パトスは「やれやれ」という揶揄の範囲で済んだが、そこに全体として帰ることはもう出来ない。

２４．ウソの区別がつかなくなった人びと

あるタレントが、ダイエット等をテーマとして日々ツイートを発信する。ところがある種の暴露番組において、これらのツイートが全部ウソだとバラされる。ヘルシーに見えるよう撮影したサラダ朝食の裏で、その何倍ものカロリーを摂取していた。「ウソばっかりじゃないか、ひどいものだなあ」と番組のスタジオ内は笑いながらも呆れるのだった。

ところがそのタレントは、以降も同じように、偽装されたダイエットのツイートを投下し続けるのだった。彼のそのツイートはすべてウソだとすでに周知のことになったのだが、彼にとってそのことはまったく問題にならないらしい。

もうすっかりウソだとバレているのに、なぜ彼はそのウソツイートを「やめない」のか。

それは、彼は初めからウソなどついておらず、暴露番組の放映以降も、やはり彼は何らウソなどついていないからだ、ということになる。

彼のやっていたこと（現在もやっていること）は、彼にとって「設定」であって「ウソ」ではない。

彼は自分がダイエットしているというウソを発信していたのではなく、ダイエットしているという「設定」を発信していた。

「ウソを発信しているわけじゃなくて、これは、こういう "設定" の発信なの」

すでに多くの人にとって、この「ウソ」と「設定」の区分はあいまいだ。いくらでも無法な都合主義がまかりとおっている。

すでに世の中に、信じがたいほどの「ウソ」が横行しており、それらは当事者にとって「ウソ」とは体験されていない。当人らは通例の「設定」をやっていて、何らの咎（とが）も自分にはないという感覚でいる。

このことに直面して、そのことへの視力を得ると、現代はすでに一種のサイコホラーの局面を迎えていることがわかる。

テレビ局がある種の隠語を用いて、情報番組でいろんな商品や店のレポートをする。

「〇〇という人気店におじゃましました」という体裁なのだが、実際にはその店側からペイメントがあってそのコーナーが組まれている。お金を払って自分の店の紹介をしてもらうということだ。

ただしもちろん、「こちらのお店はこの情報コーナーのスポンサーです」とは表示されない。

あくまで、〇〇たちに大人気とか、芸能人〇〇の行きつけ、というような形で紹介される。

その紹介の文言は基本的に「ウソ」だ。

民間のテレビ番組は広告媒体であって、スポンサーが主体で成り立つものだ、その広告スポンサーが公開表示されている場合、何ら道義的違反はない。

だが、「〇〇という人気店」からお金をもらっておきながら、そのことを表示せずにただの「人気店」とレポートするのは単純に言って不公正だ。違法ではなくてもすでに信義則に反している。

だがこのことにおそらく、テレビ局側の良心の呵責はない。

テレビ局側は、すでにそれを「〇〇という人気店」「芸能人〇〇の行きつけ」という "設定" だとする番組を作ることに、魂が麻痺してしまっている。

バラエティに仕込まれる「やらせ」も含めて、ウソと設定の区別がつかなくなっているのだ。

歯に衣を着せず言えば、テレビ局はすでに膨大なウソをやり倒していて、それはもう引っ込みがつくような質量ではなく、いまさらどうしようもないので、そのすべてを「そういう設定なんで」と言い換えて、もう何も考えないよう逃避しているだけだ。

実際そのことについて考えるだけの魂の鮮度はもう残っていないのだと思われる。

母親が病気で倒れ、残された赤子が泣いている。

が、撮影時には泣いていなかったので、その尻をちょっとつねって、わざわざ泣かせてそれを撮影する。

そんなことが「設定」で通るわけがないのだが、当事者たちはすでに麻痺している。

震災で行き場を失った飼い犬たちや飼い猫たち。

行き倒れて死んでしまった犬の映像を挿入するが、その犬の映像は別の街のものであって、震災現場の映像ではない。

そんなことが「設定」で通るのか。通るわけがない。

映画の撮影なら、フィクションを構築する正当な手口になるが、バラエティ番組や情報番組はそうはいかない、それらは看板に「これらはすべてフィクションです」という但し書きをしていない。

「情報ならびに出演者の挙動はすべてフィクションです」と前もって表示されるバラエティ番組や情報番組をいったい誰が観るだろうか？

より厳しく、リアルなところに言及していこう。

あなたが友人を集めて、みんなで Youtube を観るとする。おもしろ衝撃映像や、危機一髪の事故映像などを多数観ていくとする。

するとあなたの友人たちは、口元に手を当てて「キャー！」、あるいは目を剥き出しにて「うわあ、それはヤバいやろ！」みたいなことを言うか。

言うわけがない。

ただ Youtube を眺めているだけであって、たまに「あ、うわ」ぐらいは漏らすかもしれない、それだけだ。

みんなを集めて Youtube の衝撃映像を観るというのは、実際にやってみればわかる、屈指の「つまらないこと」のはずだ。

テレビ番組のスタジオに、タレントやアイドルが集まっていわゆるひな壇を形成し、おもしろ衝撃映像や危機一髪の事故映像を観る。

タレントたちの顔はワイプに切り取られ、その表情は豊かに、衝撃映像に対する「リアクション」を示すのだが、それらのリアクションは全部ウソなのだということになる。

モニタで衝撃映像を観ているだけの人があんな顔面と挙動のパフォーマンスにはならない。

だから、「衝撃映像にびっくりして息を飲んじゃう〇〇ちゃん」という設定で挙動しているのだ。

テレビなんてそんなもんだと誰でもわかっているつもりでいる。

「テレビなんてそんなもんじゃん」「テレビに何を期待しているんだよ」、そういう大人ぶった言いようは誰でも第一に思い浮かぶところだ。

だがそれは本当にはそのやっていることを捉えきれていないからそのように陶冶されたふうに思えるにすぎない。

自分自身でそのウソのかたまりをやってみたらわかる。

強烈なウソ挙動だ。こんなことで人をだませるのか。Youtuber の撮影や、ホステスの営業中でもなければ、とてもじゃないが馬鹿馬鹿しくてやれたものではない。

自分も他人も「まともなほうから引き離す」という、一種のやけくその決意みたいなものがなければやれないようなキツさがある。

ウソをウソとして、たとえば「ウソ泣き」をしているのであればまだわかる。誰だってそれぐらいはしたことがあるだろう。

だがそうではないのだ、われわれが目撃しているのは「ウソ泣き」ではなく「設定泣き」なのだ。

当人はそれをウソとは思っていない。

だからそれを「ウソ」だなんて言うと、こちらが悪者になってしまう。

すでにサイコホラーの局面に至っていると先ほど申し上げたとおりだ。

美人女子アナの〇〇が、視聴者に向けて笑顔でセクシーなウインクをする。そして照れくさそうに笑う。甘い声でコーナー名をコールする。

そういうことを、ウソでやっているのではなく、設定でやっているのだ。

どういうことかわかるだろうか、

「本気でニセモノを押し込みに来ている」

ということだ。

本来、同じ人間に向けて出来ることではない。

病気に効くキノコという「設定」で、なんでもないキノコを売る。

それはそういう「設定」であって、ウソをついているわけではない、というのだ。

「オレオレ、オレだよばあちゃん。元気にしてる？　ばあちゃんさ、おれ、車で事故しちゃって、大至急、二百万円が要るんだ」

という、ウソを電話口で言うのではなく、「設定」を言う。

「こういう夜のお仕事とかって、本当はすごく苦手なんですけど、母が病気で倒れてしまって、どうしてもお金が必要で……お金を貯めて、母に治ってもらって。あとは自分の勉強にお金を使いたいなって思って、がんばってます！　楽しんでいってくださいね」

という、ウソを酔客に言うのではなく、「設定」を言う。

その設定を向こうは真に受けるかもしれないじゃないかというと、
「そんなの、知らないよ〜」
とドギツい声で言う。
「だまされたい人だっていますから」
「夢を売っている商売ですからね」
そこで彼女が、
「でもたくさんの人に、本当に幸せになってほしいと思う」
と言う。あなたのことを真っすぐに見る。
あなたはどう思うか。
もしそれも、
「本気でニセモノを押し込みに来ている」
のだとしたら、あなたはそれを「そういうもんだよ」と陶冶の範疇に含めるのか。
作詞作曲をするといって、本当に当人が作詞作曲しているのかはわからない。
じきに、人工知能がインターネット上でマーケティングをし、人工知能が「売れる」作詞をもたらすだろう。
あなたがその詩文を真に受けてしまったらどうなるのか。
「そんなの、知らないよ〜」
と向こうは言うだろう。
とんでもないことがすでに起こっているのだ。
教育熱心な教師が、自分に「教育熱心な教師」という設定を当てはめて日々の教壇に立っている。
父親が「厳しいときは厳しい父親」という設定を自分に当てはめて子供の前で振る舞っている。
宗教者が、「神仏の安らぎにほほえむ偉い人」という設定を自分に当てはめて未亡人に向けて営業する。
彼氏に対しては女性らしいところをもつ、という設定を自分に当てはめ、条件のよい結婚へラブストーリーを成り立たせようとする。
「お前のことが好きだから、おれは頑張るよ」
と、彼は言うが、彼は「そういう男」という設定を自分に貼り付けているだけであって、その奥では特に何も思っていない。
何かそういうマンガを読んだときに、「こういうの、いいなあ」と思ったから、その設定を自分にも貼り付けてみただけだ。
それで相手が真に受けたらどうするのか。
「そんなの、知らないよ〜」
女子中高生は、身なりもきれいで、化粧も上手になって、頭もよく、笑顔でいて、無垢で明るく前向きだ。
彼女らが三人も四人も束になってはしゃいでいると、ひたすら「かわいいな」と見える。
でも本当にそうか。
本当に奥まで触れてみたことがあるか。
彼女らは「かわいい」という設定を自らに貼り付けている。
それをウソだとは自分で思っていない。

マスメディアが真っ先に、そのウソでしかない「設定」を、フィクションだと言い張った、その影響下に彼女らはあるわけだが……
「設定」はフィクションではない。
設定とフィクションの違いを明らかにしておこう。本来、今さら言うまでもないことだが、フィクションというのはそれがフィクションであることを前もって明らかにしているものだ。
あなたが◯◯劇場というところに入って、幕が開くと剣をもった男がふたり、舞台上で対峙していたとする。
あなたはその二人が本物の刃物をもってリアルに切りつけあうとは考えまい。
舞台上の二人がアーサーとランスロットだったとして、あなたはそれが彼らの戸籍上の名前だとは思わないだろう。
作中の、登場人物の名前であって、それぞれの「役」だとあなたは自動的にみなしている。
バラエティ番組に出てくるアイドルタレント◯◯ちゃんは、「作中」の人物か？
アイドルタレント◯◯ちゃんを誰も「作中」の人物およびその「役」だとは思っていないのだから、バラエティ番組への出演はフィクションではありえない。
よって、「テレビはけっきょくフィクションだから」という言い分は通らない。テレビはそれがフィクションだという表示を明らかにしていない。
だいいち、そのひとつひとつをフィクションにして毎週お届けするなどという離れ業は、ふつうの人間にできる所業ではない。かつての「ドリフターズ」ぐらいにしかできない。
「バカ殿」を見てあれがどこかの大名だと思う人は誰もいないので、バカ殿はフィクションとして成り立っている。
多くの人は、このフィクションというものを成り立たせることの、果てしないむつかしさと、膨大な魂の負担を知らない。
本当はフィクションのほうがむつかしいのだ。ふつうの人は一生に一度も、自己からフィクションを産み出すことはできない。
だがほとんどの人は、ノンフィクションよりフィクションのほうが、「空想だからカンタンだ」と思っている。
だから「設定」をフィクションと勘違いする。
パトスの欲望で湧いて出たあわれな「設定」をフィクションと言い張る。
パトスは生身から湧いて出るのだから源泉からノンフィクションだ。
それで「設定」の人は、「ごっこ遊び」をフィクションと誤解する。
ごっこ遊び、現代で最もわかりやすいのは「コスプレ」だ。
全員でコスプレをして全員でセリフを真似れば、その原作の「実写版」が撮れるかもしれない。
仮にあなたが美貌の女だったとする。男たちが吸い寄せられてたまらない「えっち」な体をしていて、それを見せびらかすことに正直なところ楽しみと優越感も覚えているとする。

流行のマンガから「コスプレ」をやってみて、その写真をＳＮＳに投降したら、大量の絶賛コメントとファボがもらえた。

そういうごっこ遊びをしていたとする。

そのあなたの美貌と肢体と、目立つところとセックスを目当てに、男が言い寄ってきた。金持ちの男で、マザコンやマゾヒズムの気配がある。

男の見た目は悪くない。まだ若く、成功者らしくて、あからさまに高級な腕時計をしている。

ぜひあなたと食事に行きたいと男は申し出る。

あなたはその男のことを、「扱いやすそう」と直観する。

あなたは恋愛に対する興味を持っていない。マンガの中で見かけるそれは楽しく味わうが、自分がそれをやってみるという気にはまったくならないし、恋愛そのものがよくわからない。

イケメン、というものはそれなりにわかるけれど、それが「大切な人」になるというのは、まったくよくわからない。

自分にとって大切な人というと、母親とか、なんだかんだ自分をここまで助けてきてくれた人だ。そういう人には感謝しないといけないと思っており、それは「大切な人なんだろうな」と思っている。

目の前でその若い金持ち男が、お願いします、と懇願した。

そのときあなたは、自分に「恋人」という設定を貼り付けて、恋人ごっこを遊んでみるという発想について、「まったくわからない」と言うだろうか。

むしろあなたにとってこのとき、「恋人」という設定で遊ぶこと、「恋人ごっこ」で遊ぶということは、一番「それならわかる」というように馴染みやすいものではないだろうか。

とんでもなく高級な牛肉とやらを食べてみたい。

友達に対しては「友達」という設定、チャリティに対しては「博愛」という設定。

映画を観たら「感動」という設定を自分に貼り付ける。

そうすることで、自分の「経験」や「体験」を増やしていくことができるじゃないか。

一方、本当に気分のよいことは何か？　それは運動で汗を流したり、新しい服を買ったり、エステで全身を快適さに浸すことなどではないだろうか。

このようにして現代は、パトス快感のバケモノが、すべての魂に関わることを「設定の貼り付け」でやりくりし、望ましい「体験」を窃取しようと企んでいる状態にある。

無邪気で、友達を大事にして、照れ屋で、人に悪意を持たないという、彼女の「設定」が貼り付けられてあるのであって、それらはすべて「ウソ」だ。すてきな笑顔がつい出るというのも貼り付けられた設定であってウソだし、プライベートでは思いがけず人情派というのも設定にすぎずウソだ。

しかも、自分が「ウソ」を遣り続けているという自覚は持っていない。

「すべてのことを、なるべくあるがまま、自然に無理のないように、やっているつもりですけど？　自分にウソをついても、どうせ続かないですからね」

当人はまるきりそう思っている。

そこまで徹底しているものだから、むしろその「設定」こそ彼女の真実と言いたくなってくるほどだ。

なぜこのようなことになるのか、正しく原理から視認しておくことにしよう。

彼女には何の「話」もないのだ。

パトスが彼女の神であって、ロゴスは二流のするレスバトルでしかないのだから、彼女にロゴスたる「話」は成り立ちえない。

仮に彼女が若い金持ち男と恋人になるとしたって、彼女にはその恋人になるという「話」じたいがないのだ。「認識」はしえても「話」はない。

彼女には「友人」というような話はないし、何かが「大切」というような話もない。

「愛」なんて話もない。彼女にあるのは自分にとって「本当に気分のよいこと」という自己愛だけだ。

「話」そのものがないのに、「本当の話」など問われても、応えようがない。

だからすべてのあるべき「話」は、「設定」に置き換えられる。ここまで述べてきたように、「設定」が「話」の代替になる。

恋人という設定、友人という設定、大切という設定、そしてかわいい自分という設定、自分に誇りを持てるだけ努力して前向きでいる自分という設定。

「話」そのものが魂の機能として存在しない以上、「話」に関わることはすべてウソにならざるを得ない。

もし彼女が、その「設定」をやめて、本当の自分に向き合おうとしたら、気分のよいこと以外に対してはすべて、膝を抱え込んで「ぐずり続ける」という "本音" しかないのだ。

もし彼女が「エヴァ」を観たら、碇シンジの振る舞いに対して、「ある意味、勇気あるな」「ある意味、うらやましい」と共感を覚えるかもしれない。

「あそこまで本当の姿を見せられないもんな〜」

だから現代のそうした女性は（男性も同じだ）、運動で汗を流す傍ら、堂々とオタク趣味という人が多い。

「話ではない」もの、パトス亢進ビデオやマンガを、意外とむさぼるように読んでいる。パトス・ソシャゲをフリックしまくっている。

彼女が先輩に対して、

「なんだかんだ◯◯さんのこと尊敬しています」

と、実にかわいらしく言ったとして、それがウソのつもりは当人にもない。ただ、それは「設定」でしかないと言われたら、そうなのかもしれないと思う。

だが彼女にはその「設定」というのが「本当でない」というのがどうしてもわからない。

「〇〇さんのことを尊敬していると言ったけれど、あなたにとって〇〇さんはどうでもいい存在でしょう」
　と言われたら、それこそウソをついてごまかさない限り、
「そうですね。尊敬はしていますが、どうでもいいといえば、まさにどうでもいいです」
　となる。
「なぜ尊敬しているのに、どうでもいい人になるの」
「なぜでしょうね。自分でもわかりません。うーん、単にそういうものなんじゃないですか？」
　彼女にとって〇〇さんを尊敬しているというのは、ウソではないがウソなのだ。
　彼女は「本当の話」にたどり着くことができない。

２５．ロゴスの徒たるあなたはまったく別に存在する

　果てしなく話は続いていきそうだ。きりがないのでしめくくりに向かう。
　われわれが周囲を見渡すかぎり、ほとんどの人は無垢で、かわいらしく、健気で、罪のない、良識をもった、友好的な、明るく、協調性のある、こころある存在に見える。若い少女がおめかしして、友人たちとはしゃいで街を歩いていればなおさらだ。まったくどこをどう見ても、何の問題もなく、すべて「別にこれでいいじゃん！」に見える。
　だがすべてのことは一点、「話」が失われたということに結ばれる。
「話」の機能が失われた人びとはどうなるのか、という一点にすべては収束していく。
　外見上からの印象にいちいち目利きをはたらかせる必要はない。
「話」は人びとに掴まれているか、視認されているか、共有されているか、「話」のもとに人びとはいるか、という一点だけを焦点にしていい。
　可憐な女の子がこちらを見上げて「おはようございます」と言う。まだ薄桃色の唇のまま、照れくさそうに、それでも勇気を出してだ。
　そうすると、彼女のすべてはすばらしいものに思える。そのとおり、わたしも彼女のすべてをすばらしいものと思う。
　ただわたしが知っているのは、このすばらしいものたる彼女が、「話」を視認できずにその後どうなっていくかだ。すばらしいものたる彼女の底に、どのように容赦のない「穴」が空いていくか、わたしはそのことを憎んで今この話をしている。
<<わたしが彼女のことをどれだけ「かわいい」と思ったとしても、そのパトスの向こう側に神話は決してない>>。
　神話をもたらすとしたら、ロゴスの主として、わたしから彼女にそれをもたらすのでなくてはならぬ。
　なぜ彼女が「かわいい」からといって、彼女に神話の主たらんことを押し着せるのか。
<<絶対恐怖領域に無防備の権威で立つのは、第一にわたしであって、彼女であってはならない>>。
「おはようございます」と見上げて言った彼女の姿に神話があるのだとしたら、その神話の由来は、彼女の見上げる先、わたしの側からもたらされていなくてはならぬ。
　ただ底抜けに「かわいい」だけでは、何の神話でもない。
　二十五年にわたるパトス洗礼、その大量のパトス水を浴び続けることが起こり、ロゴスは果てしなく失われたとして、そのパトスの徒は、どのようにしてロゴスの徒に転じる、ないしは帰ることができるだろうか。
　それをどうすればよいものか、わたしは知っているが、この話はまったく人びとの想定できる範囲になく、どのように説明してもまず伝わることはない。
　ロゴスは理知であり言葉であり「話」だが、そのロゴスの果てはどうなっているかというと、やはりわけのわからないものだ。それはロゴスでありながら、それ以上の何かだ。一般的に知りうるロゴスを理や言葉と当てはめるなら、ロゴスの果てにあるロゴスの玉座には、理や言葉が知識となる前の、「それじたいの事象」みたいなものがある。
　パトスの果てにあるものが、もはやパトスではなくただの「完全なる崩壊」であるようにだ。
　ロゴスの果てには「完全なる形成」それじたいがあり、パトスの果てには「完全なる崩壊」それじたいがある。
　ただしいかなる闇もこの光を打ち倒しはしないので、完全なる形成の権威があるところ、完全なる崩壊などは事象平原から完全追放される。
　現在、ほとんどの人はパトスの徒であるよりなく、そのパトスの徒たる「私」が、ロゴスの徒に転じることは原理的に不可能だ。
　なぜなら、その「私」という自認じたいがパトスで成り立っているからだ。
「私」という感情が「私」になっているので、その「私」がロゴスの徒に転じることはありえない。
　では感情ならざるわたし、パトスならざるわたしというのはいかように存在するのか。
　ここからは、一般にはまったく考えようもない話になる。
　ロゴスたる「わたし」、それはもともと存在していて、ただひたすら遠く、まるで今のところ「わたし」とは思えないだけだ。
　パトスの私がロゴスのわたしを探すことは、地球上で太陽を探すことに似ている。
　地球上を照らしているのは太陽だ、太陽ほど、探すのに困難がないものも他にない。

太陽は常にそうして、探すまでもないものなのに、地球上のどこを探し回っても太陽は見つからない。

太陽を見つけるためには、地球から飛び立って太陽に行かねばならないが、地球から飛び立つということがまず無理な条件だ。われわれはどんな高跳びをしても、地球の重力圏に落下してこざるをえない。

ここで、奇想天外な、あなたにとって信じがたいことを持ち込む必要がある。

どのようにして持ち込むかといって、それは、わたしの「話」をもってそうするしかないわけだ。

あなたが太陽にいかずとも、もともと太陽にもあなたがいるということだ。

太陽にいるあなたの栄光こそを増せ。

そのことは、地球上にいるあなたの権勢と、何らの関係もないだろう。

あなたが地球上で高級な靴を履いたとしても、太陽にいるあなたの足しにはなっていない。

太陽にいるあなたが頭に月桂冠を巻いても、地球上のあなたには何の足しにもならない。

これではまるで、太陽にいるあなたに足しをしても、「私には何の意味もないじゃないか」と思えるのだが、そうではない。

太陽にいるあなたの側において、地球上のあなたに足しをしていることが、「わたしには何の意味もないじゃないか」になっているのだ。

ロゴスの徒たるあなたはそれぐらい遠く、まったく別のところにいる。

けれどもそれは、ロゴスの徒たるあなたが「いない」わけではないということだ。

パトスの徒から見てロゴスの場所が遠いだけで、ロゴスの場所にあなたがいないわけではない。

よかったな、と素直に申し上げておこう。

ただし、何かこのことにとてつもない侮辱を投げつけた者については、ひょっとすればその限りではないかもしれない。そのあたりはもう、人知のおよぶ範囲にない。

あなたは自分に関係のあることについては努力するのが得意だ。

けれども、自分に関係のないものについて努力するというのは、まったく意味不明に感じられる。

自分に関係のないものについて努力する、つまりたとえば、マレーシアの海辺に置かれてカニの棲み処になっているテトラポッドを拡大する、というようなことだ。

あなたが自分の街を歩き、その一歩を踏みしめるときに、マレーシアのテトラポッドが「大きく」なるようにその一歩を踏みしめる。

自分の街にいるあなたとその足許のことは忘れろ。目を開けていれば見えているのでそれで十分だ。

わけがわからないだろう。

あなたの足許はマレーシアの海辺につながってはいない。

無関係だ。

ただ、「無関係のものが届く」ということはあるかもしれない。

実感として、無関係のものは届かない、その届かないということを無関係だと一般に言うのだが、実感のパトスに権威を譲るな。

わたしが「無関係のものが届く」と "話した" とき、あなたは瞬間的に何かを視ているはずだ。その直後には、あなたはわたしにパトスの水をぶっかけてしまうということも、わたしは重々知っているけれども。

太陽にいるあなたの栄光こそを増せ。

大丈夫だ、太陽と地球上は無関係だから、太陽にいるあなたが栄光を増したとて、地球上の誰にもバレはしない。

人が何かの星のもとに生まれているとするならば、地球上のあなたを増すな、その「星」のほうを増せ。

その「星」があなたの「ロゴスたるわたし」だから。

わたしの話していることは、あなたにとって視認の限度を超えてしまうだろうが、それでもわたしがいましているのは「話」であって、「設定」でもなければ、概念でもイメージでもないということはわかるはずだ。

わたしの話していることは、太陽にいるあなたに聞こえなくてはならないものだから、地球上のあなたがどう反応するかということにはあまり意味がない。

せいぜい、極端な侮辱が飛び出すようなことがなければよいと願うぐらいだ。

わたしには人類補完計画などというような感情ほとばしるプランはない。

わたしはすでに、ロゴスの果てには「完全なる形成」それじたいという事象があると言及しているのだから、そもそも補完などというものは発想から要らないだろう。

太陽にいるあなたの栄光を増せということ、地球上のあなたなんて「何それ？」と忘れろ。

いまこの話は、本当にわけのわからないものに聞こえるが、二十五年前はそこまででもなかったのだ。

二十五年前は、そこまででもなかったから、こんなことをわざわざ話す必要がなかった。

それなりの人が、地球上のことがわかっていなくて、何もわからないまま、太陽にいる自分の栄光を増そうとしていた。

どことなくそういう日々があったのだった。もちろんあるていど、人によるし、場所にもよると思うけれど。

おれの話はめちゃくちゃではない。

「パターン青！」のほうがめちゃくちゃだ。

パトスの徒たるあなたが、あなたにとって一番身近な「私」として存在する。

ロゴスの徒たるあなたは、あなたにとって一番遠い「無関係なわたし」として存在する。

わたしの話は太陽にいるあなたに聞こえていて、パターン青は地球上のあなたに聞こえているだろう。

２６．神話の主はあなたであれ

以上ですべての話は終わり。

新世紀エヴァンゲリオンはどんな話かといって、それは「話」ではない。

二十五年前に引かれた、パトス洗礼の大きなトリガーのひとつだった。

それは 90 年代の神秘主義としてすり抜けて生き残ったものだ。

パトスはロゴスを解体する。

「話」を失った人びととして現在のわれわれがある。

大学生が大声で「それな」と言い合っているのは、一見「楽しいのかな」と思える。

おめかしをした女子高生たちはみんな明るくて「かわいい」ように見える。

だが「話の機能を失った」ということだけが収束点になる。

やがてパトスを積み込んだオーガズムに天国を求めるということにどうしても行き着く。

「話」を失った人びとは、フィクションと「設定」を取り違える。

パトスから生じた「設定」の貼り付けを「話」だと誤解する。

「設定」は概念・ノンフィクションであって、要はただの「ウソ」だ。

それでウソを貼り付けることに麻痺していき、平気でそのウソを発信するようになる。

すでに世の中は、大量のウソが堂々と発信され、当人らはそれをウソだと思っておらず、「そういう設定だから」と平気で思っている。

本当のことに帰ることなどできない。

本当の「話」に帰ろうとしても、もう「話」じたいがないのだ。

パトスから生じた「設定」を思いきりやる、パトス亢進ビデオとマンガ、ソシャゲ。

すでにメインカルチャーもそちらが主流になった。

それらはすべてノンフィクションであって、そこにフィクションなんか無かった。

すべては「絶対恐怖領域」から始まっている。

無念なことに、それはすでにサルトルが言及済みかつ、失敗済みのものだった。

自信のないところに「他人」に入り込まれると、支配されてしまう。

「出口なし」、永遠に自分が認められず他人に支配され続ける地獄だ。

形成される作用のない世界はひたすらグロテスクで、嘔吐がせりあがる。

これらのすべてを打ち払ってくれる神、それがパトスだった。

パトスが神なのだと福音書を書き換えよう。

そうして吾らのパトスは神になってしまい、揶揄の対象ではなくなった。

二十五年のパトス水を振り払い、ロゴスの場所へ帰れるだろうか。

そのことは原理的に不可能だ。

そうではなく、ロゴスの場所にもあなたはいる。

パトスのあなたとまったく無関係のあなたがいる。

太陽にいるあなたの栄光こそを増せ、それがどういうことなのかは、あなた自身がそれをするときまでわからない。

最後にまったくどうでもいいような話をしよう。

おれだって 90 年代を若い奴として生きた一人だ。エヴァのファンではまったくなかったけれど、当時、ある種の切なさがあって日々の夜が過ぎていったことを、おれだって知っている。

当時はまだ、ポケベルがあったりなかったり、メールがあったりなかったりだ。毎夜、押し寄せてくる切なさやさびしさは深く大きいものだった。それでダイヤルアップでインターネットにつないでいたんだろう？　テレホーダイの 23 時を待ち受けて、それでも毎月の電話代に怯えながら。

ここまでずいぶん大量のことを話したけれど、それでももし、自分は綾波に恋をした、アスカに惚れたんだという人がいたならば、自分が惚れた女のことじゃないか、誰に何を言われても自分ひとりが胸に抱えて生きていけ。いちいち批評やら考察やらで振り回されるのじゃない、同好の士ともその恋を共有するのはやめるんだ。テメーの恋を外側に持ち出すことについて、綾波やアスカに悪いと思わないのか、その点だけは恥を知れ。テメーはよくても女性の側のプライバシーってものがあるだろう。

しょせん、エヴァに出てきた女の子たちが「えっち」だったから、たまらず恋をしたというだけかもしれない、それでもテメーで恋をしたのだとしたら、テメーひとりで抱えて胸を張って生きていけばいいだろう、決してうつむくな、うつむくことは綾波なりアスカなりに対する侮辱になろう？　彼女らが許したとしてもテメー自身でそれを許すな、もしそれが出来ないならテメーで言い張った恋うんぬんを撤回しろ、そんな弱っちいものを恋などと言い張っていい権利は誰にもない。

おれは「エヴァ」をひととおり観て、それをフィクション作品と認める向きにない、ノンフィクションのパトス亢進ビデオだと断じよう、そこに何の「話」もない。

けれども意外に思われるかもしれないが、スケベ男どもが恋したであろう綾波やアスカに対してその否定は向けない。そりゃそうだろう、なんでおれが半裸で振る舞っている十代の女の子を否定するわけがあるんだ。

綾波もアスカも、チンコにパトスを積むものでしかなかったとして、そんなことでおれが女の子を否定するものか。

年端もゆかぬ女の子なのだから、おれに対しては、チンコにパトスを積むだけの存在であってかまわない。それどころか、もっとおれのチンコにパトスを積め。そのことばっかりしていてかまわん。やりたい放題やれ、おれのためにもっとエロい恰好をしろ。

神話が欲しければおれがやる。おれが女の子に神話をやる。なんでおれが女の子に神話をねだるわけがあるかね。

女子中学生のパトスごときがよってたかっておれを昂らせたとして、そんなことでおれのロゴスが解体されるわけがないだろう。

使徒なんて、おれが「帰れ」と言えば帰るんだよ、使徒はおれの姿を見たら攻撃できないの。それどころか、「おれが食べる魚を獲ってこい」と言えば、使徒はよろこんでおれの魚を獲りにいくだろう。

おれが何を言っているかわかるか、おれの言っていることはいつもシンプルだ。

お前が「エヴァ」に入るなって言ってんの。

彼女らを「エヴァ」から連れ出せって言ってんの。

お前がパトスに神話を求めて「エヴァ」の中に入っていこうとすることじたいが誤りなの。

彼女らがロゴスに神話を求めて「エヴァ」の中から飛び出てこないといけないの。

お前が男たるゆえんは何だあ。

神話を求める女の子の飛び込む先が男でないといかんでしょ。

お前が神話を求めて女の子にしがみついてどーすんの。

液体人形の綾波が破裂するのだったら、お前が形成の魂を与えて綾波を守れ。

お前が形成の魂を与えたらそれはもう液体人形じゃないだろう。

誰がそれをやるといって、お前がやるのだ。完全な形成という事象それじたいを「お前が」ディールしろ。

綾波が複製として一万体いるなら、一万体すべてをテメーの妻にしろ。それでエディプス・コンプレックスと言われるなら、そのほかにも別の一万人を妻にして冷やかせ。

お前がゼーレに解散を命じろ。「人類補完計画とかいうゴミは中止です」とお前が命じればそれで済むことじゃないか。

ゼーレとかいう板はどこか公衆便所の建築資材にでも使え。

おれの言うことは常にシンプルで、

「神話の主はお前であれ」

と言っているだけだ。

神話の主がお前なら、どこぞの少年が神話になるとかいううわごとに耳を貸さなくていいだろう。

おれはエヴァのファンではないが、そんなことは徹頭徹尾、どうでもいいことに決まっている。

そうではなく、逆だ、

「綾波もアスカも、おれのファンじゃなきゃだめ」

とおれは言っているのだ。

絶対恐怖領域といって、お前が怖がるのを自慢してどうする。

邪なるものにとって、お前自身が絶対恐怖領域にならなきゃだめなんだって。

「エヴァ」は何の話でもない、パトス亢進と無上射精への不毛なアプローチだ。それに比べたら、おれが今ここにしている「話」のほうが遥かにマシだ。

よって、「エヴァ」に対する完全解答は、それが何の「話」でもないということと、それに巻き込まれたカワイ子ちゃんたちを、まともな「話」に連れ出してやる、ということなのだった。

というわけで、長々と続いた話をこれにて終劇としよう。

最後に何を申し上げておくか。

なぜこんな話になっているか、申し上げておこう。

おれは今さら、

「二十五年前に、このエヴァというやつがあったんだなあ」

と振り返っているのだ。

それと同時に、ここには書かないけれど、おれはおれで、このように思い知らされている。

この二十五年間、まったく正反対の洗礼を浴びまくってきた。

二十五年前の今ごろ、おれはおれで、反対側のトリガーを無数に引きまくっていたのだった。

おれのほうはまだまだ最終話には届きようもない。

そう考えると、おれ自身の話をちゃんと完結に向かわせることのほうが、リアルに何万倍もキツいなあと、気が遠くなるのだった。

この先もロゴス亢進ものをやるのかよ。

思わず「逃げちゃダメだ」と言いたくなるなあ。

でもしょうがない、二十五年前から、おれは自分のＡＴフィールドを壊してきたからな。

すべてはおれのシナリオどおりに進めるので、今後ともよろしく。

［今さら新世紀エヴァンゲリオン劇場版をぜんぶ観て、
それを考察しないという正しいことの解説
および二十五年間のミッシングリンクの発見／了］